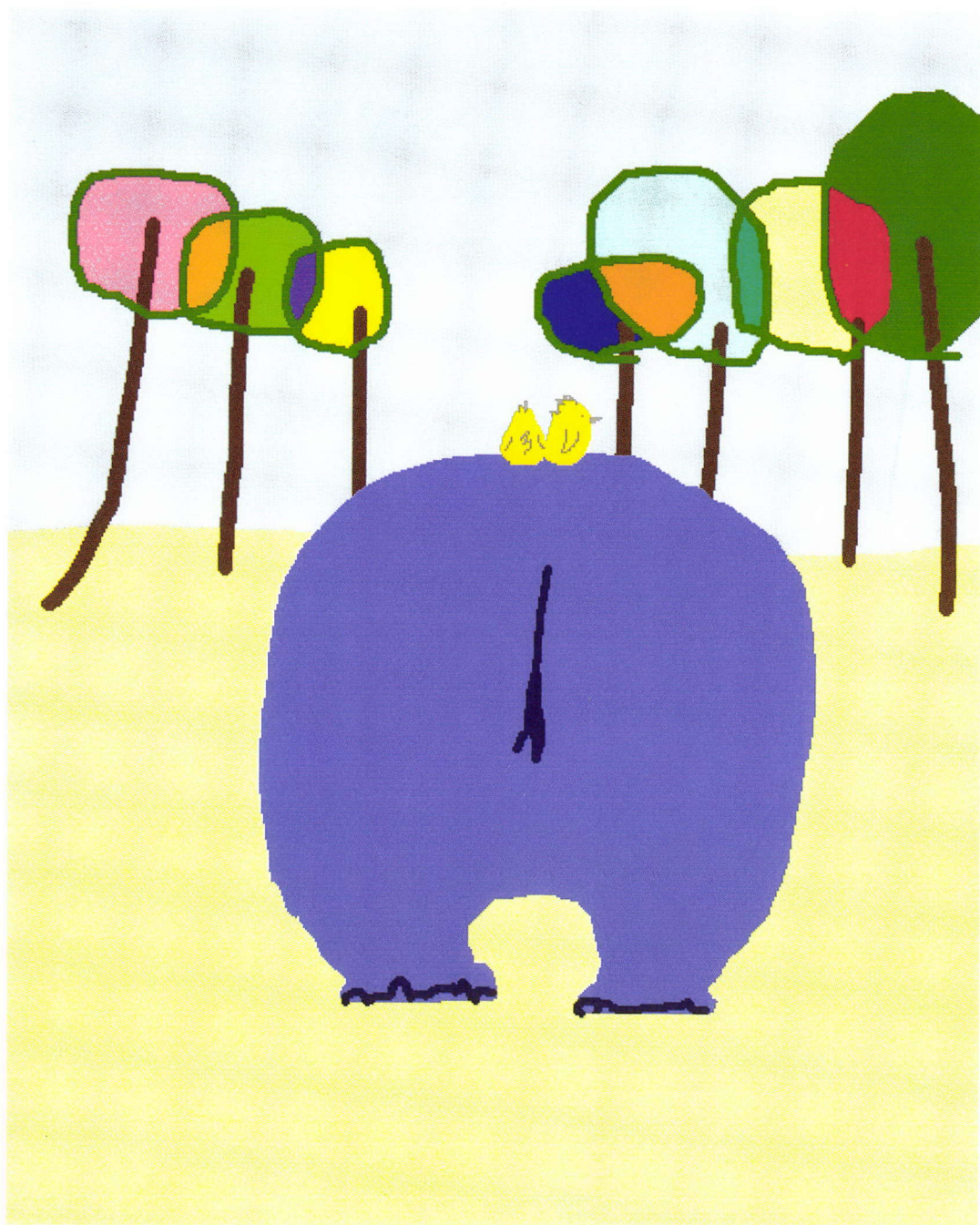


# 家族とくらし



●特集／自治体はどうささえるか？

18号





	photo	杉原 志保	2
	こんな働き方応援したい 子どもとともに体験を共有する 高比良正司さん	広岡 立美	4
<b>特集</b>	<u>自治体はどう支えるか?</u>	中央大学 広岡ゼミ	10
	<b>女性のエンパワーメント</b>		
	山口県の女性の起業に対する支援		11
	山口県の男女共同推進参画		14
	やまぐち県民活動支援センター		18
	NPO法人山口まちづくりセンター		23
	洋菓子工房「ゆーたん」		26
	<b>バングラディッシュの子どもたち</b>	中谷 美世子	32
	常住坐臥 9	広岡 守穂	35
	<b>そんなつもりじゃなかつたんです 18</b>	加納 かがり	42
	うたの手帖	木村 郁子	47
	医療の現場から 徒然日記 真の温泉好きとにせ温泉好き	小谷 和彦	48
	<b>地方政治を考える</b> ～リサイクルでは間に合いません～	広岡 立美	50
	赤ちゃんの尊厳死 -18トリソミーの会-	櫻井 浩子	53
	書評 美しく生きる	編集部	56
<u>エッセイ</u>			
	派遣で働く若い女性の心のうち	広岡 守穂	57
	女性のライフスタイルを考える	小山 賢美	62
	全国に広がるファミリーサポートセンター	石田 敦子	65
	<u>NPOパワーアップセミナー開催</u>	土門 未央	69
	2001.9.11 in New York	割石 健介	74
	編集後記		80









Bleu\*nu。

2人が立ちあげているブランドである。

彼女たちは、自分たちでデザインした洋服や小物を、インターネット上や年2回のデザインフェスタで販売している。Tシャツやキャミソールに描かれた、どこかこうシュールでキュートな蝶やウサギたち。オリエンタルな雰囲気をもつワンピース。[ブルー]のスペルがひっくり返る、そんな遊び心は、手がける洋服の雰囲気そのものだ。

Bleu\*nu のその“遊び心”は、人形にも向けられている。1960年代、アメリカで「ブライス」というパッチリとした眼がトレードマークの人形が発売されたのをご存知だろうか。その人形が今、ふたたび一部のマニアから熱烈な支持を受けている。「ブライスと同じ服を着たりするのって、また楽しい。」彼女たちは今、そのブライスの洋服も手がけているのである。

そういった遊び心は、くりかえしの日常に気持ち的な豊かさを与えてくれる。卒業後、就職活動もしたけれど、彼女たちは自分たちの創造の可能性にかけてみよう、自らの足で歩きだした。友達のはじめたレストランのウエイトレスの洋服を手がけたり、デザインフェスタに参加したり。少しずつ、少しずつ自分たちの足場を築いている。この先どうなるのかわからない。けど、今できることを、精一杯やってみよう、と。

海外に行くと、布地が気になって店に足を運んでしまうという。日本にないその色合いに、心惹かれるのだという。Bleu\*nu は、服づくりにトランスナショナルなアイデンティティを取り入れながら、更なる“遊び心”を追求する。

VOL. 18

渡辺佳代子 村田あや

【Bleu\*nu】

<http://www.bleu-nu.com>

写真/文 杉原志保



# 子どもとともに体験を共有する

## 高比良正司さん

広岡 立美

高比良正司さんは、「子ども劇場」をはじめた人だ。

高比良さんは、1944

年、長崎市生まれ。親の転

勤で大分、福岡にいた高校

生時代から演劇部で活動し

ていた。春休みや夏休みに

なると、学校の予算で演劇

部の仲間と辺地の子どもた

ちに劇を見せるため、あち

こち巡行してまわった。小

さな村や町を訪れ、劇を演

じ、劇をつうじて子どもや

お年寄りとのつながりを体

験した。

今ではとても考えられな

いことだが、高比良さんた

ちは行く先々の学校に泊め

てもらった。まるで旅芸人

のようだった。先生はいっ

しよについて来ることでも来

ないこともあった。劇が終

ると舞台の袖にかぼちゃや

茄子が置いてあったりした。

40年前、敗戦後の日本がま

だ混乱期で、そうして人々

がとてもおおらかな時期だ

ったころの話だ。

そのころ地方に住む子ども

もたちが本物の舞台を観る

ことはほとんどなかった。

そんな子どもたちと文化体

験をしたらおもしろいだろ

うなあ、やってみたいなあ

と高校生の高比良さんは思

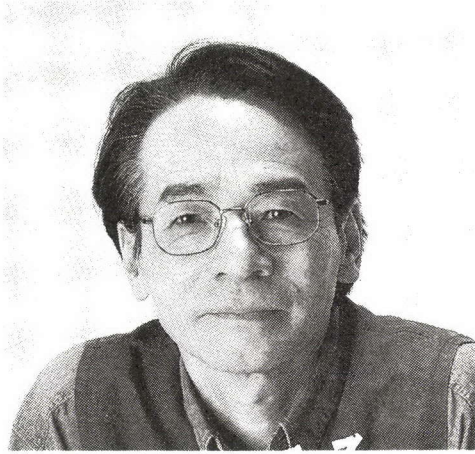
っていた。いいや、子ども

たちが劇を観るだけではな

く、子どもたちといっしょ

に劇を作れたらもつといい。

夢がふくらんだ。



高比良正司さん

大学生になったのは、60年安保の直後だった。その

ころは学生運動をしない学生は学生でないような雰囲気

だった。高比良さんは政

治運動ではなく、劇団を作

って、高校生時代から抱い

ていた夢に向かって進んで

いった。劇団を3つも作っ

てかけもちしたり、団地の子どもたちと人形劇をしたりしていた。

60年代は子どもの育ちの転換期だった。

それまで子どもは地域の

中で育つのが当たり前の時

代だった。まちのあちこち

に空き地や原っぱがあった。

夕方あたりが暗くなるまで、

の様子が変わってくる。新

幹線が開通し、東京オリ

ピックが開催され、日本経

済は高度成長期に突入して

いた。自動車がふえ、テレ

ビが普及し、受験競争が激

化して、まちから子どもが

姿を消しはじめた。受験地

獄という言葉ができ、人を

け落とさなければ志望校に

進学できないという風潮が

広がりはじめた。人と人と

が触れ合い、本気で力を合

わせたりぶつかったり夢中

になったりする機会が失わ

れていった。高比良さんは

子どもの育ちが変わってい

くことを肌で感じていた。

大学を卒業していったん

は企業に就職したが、高比

良さんは会社勤めのかたわ

ら演劇活動をつづけた。近

所の子どもたち40人を集め

て「こぐま座」をつくり、

団地集会所などで公演をし

ていた。

しかし仕事と活動の両立

はむづかしい。せつかく就

職した会社だが、高比良さ

んは8カ月で辞めてしまっ

た。そして、仲間たちと

「福岡子ども劇場」をつくっ

た。1966年のことであ

る。

高比良さんは、親と子ど

もが一緒に創造体験する場

をつくりたかった。みんな

代になると社会

しかし、60年

かけたくれたり

おばさんが声を

あげてくれたり

り、おじさんや

あがりこんだ

た。近所の家に

大勢で遊んでい

た。

大勢で遊んでい

た。

大勢で遊んでい

た。

大勢で遊んでい

た。

大勢で遊んでい

た。

大勢で遊んでい



高比良さんと広岡 事務所で

時NHK はじめ高比良さんたち  
 福岡支局 は、子ども劇場を全国に広  
 勤務だっ げようとは思っていなかっ  
 たプロデ た。仲間がつくるサークル  
 ユーサー 運動のつもりだった。子ど  
 の清川輝 もが好きで、子どもたちに  
 基（現N すぐれた本物の舞台芸術を  
 HK放送 安く見せたいと、都会から  
 文化研究 劇団を呼んで公演をした。  
 所）さん、 すると劇団の人たちが驚き、  
 児童相談 その感激を全国へ発信し始  
 学院大学教授）さん、運営 めた。何に感激したかとい  
 委員長として母親の目線を うと、観客である子どもた  
 大切にしてくれた青木妙伊 ちの様子に感激したのだ。  
 子（現福岡子ども文化研究 こうして70年代から80年代  
 所所長）さん、そして高比 似かけて会員は急増し、子  
 良正司さんだった。 ど劇場は全国各地に広ま  
 っていった。やがて西日本  
 連絡会が発足し、全国連絡

がいつしよに力を合わせて  
 何かを完成させる、そんな  
 体験の場をつくりたかった。  
 子どもたちが文化に接し文  
 化に参画する場をつくりた  
 い、そんな思いで子ども劇  
 場の活動に奔走した。

会の中心メンバーは、当

所勤務の渕上継夫（現西南  
 学院大学教授）さん、運営  
 委員長として母親の目線を  
 大切にしてくれた青木妙伊  
 子（現福岡子ども文化研究  
 所所長）さん、そして高比  
 良正司さんだった。

会が発足した。そして、全  
 国に大小合わせて600も  
 の子ども劇場ができた。

子ども劇場と高比良さん  
 の活動の軌跡は、そのまま  
 日本にNPO活動が広がっ  
 ていき、それが社会を変え  
 ていく軌跡に重なっている。  
 たとえば子ども劇場が取り  
 組んだ問題の一つに「入場  
 税」がある。入場税は「文  
 化はぜいたくだ」という発  
 想で戦前につくられた法律  
 である。子ども劇場の活動  
 の実態にくらべると、法律  
 そのものが時代遅れだった。  
 演劇と法律という観点から  
 みると、おかしなことはま



だある。たとえば学校の近くには劇場をつくってはいけないという法律がある。映画館や芝居小屋に出入りすることは風紀上好ましくないとされていた戦前の考えにたったものである。子どもの文化活動を育てていくとすると、こういう古い社会の仕組みにぶつかることがでてくる。高比良さんにとって、こういう経験の延長上にあるのがNPOとNPO法（特定非営利活動促進法）である。

1994年、高比良さんはNPOのことを知り、アメリカへ視察に行くことに

した。声をかけると50人くらいが集まった。しかし、そのころはアメリカへ向かう飛行機の中の会話で「NPOとPKOはどう違うの？」という質問が飛び出したほどで、NPOといつてもちゃんと理解している人はほんの一握りだった。

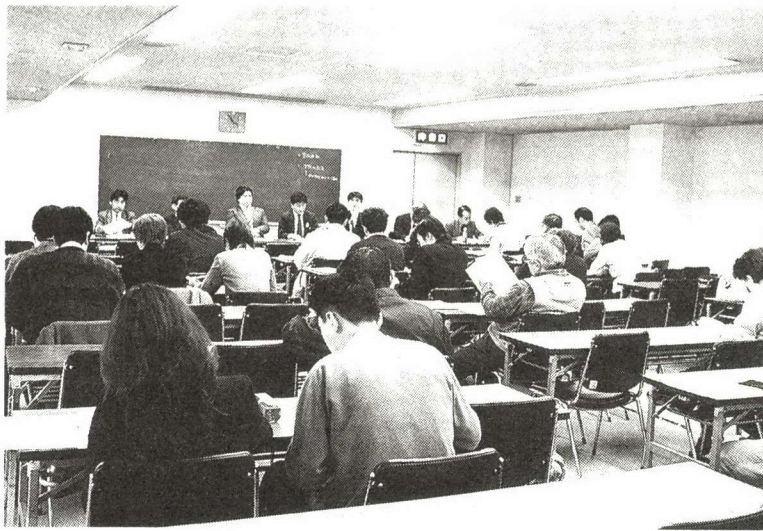
NPOとは非営利の活動をする団体のことである。法人格をもつ団体（非営利法人）も法人格のない任意団体もある。その意味でいうと、私立学校や社会福祉法人などは法人格を持つNPO（非営利法人）である。といってもNPOは収益事業をしてはいけないわけで

はない。私立学校は生徒から授業料を取っているし、社会福祉法人は入居者からサービスの対価を受け取っている。そうしなければ経営が成り立たない。では株式会社などの営利法人とどう違うかというと、株式会社には株主がいるが、非営利法人（NPO）には株主はいない。株式会社は収益を株主に分配するが、非営利法人の場合はこれを理事に分配してはいけないのである。

アメリカ視察で高比良さんは、自分たちが行ってきた活動がまさしくNPO活動であることを実感した。

しかしそのころの日本では市民の非営利活動に対しては「ボランティア」という言葉があるくらいで、市民が自由に非営利の活動を繰り広げるというイメージそのものがなかった。財団法人や社団法人などの非営利法人は存在しているが、設立しようとしたら越えなければならぬハードルは非常に高い。そもそも株式会社のような営利法人をつくるのは届け出だけでよいのに、社団法人などの非営利法人をつくるには主務官庁の許可が必要なのである。

1995年、阪神淡路大



### NPO関連事業予算の説明会 石川県女性センターで

震災がおこった。7000人近くの人の命を奪った大災害に、日本全国からボランティアが神戸にあつまり、ボランティアの重要性がある。NPO法を作るために奔走した。NPO法は議員立法でつくられたが、法案づくりの過程には文化芸術や福祉や国際交流や分野での民活動をしてきた

らためて認識された。そのためこの年はボランティア元年といわれる。これを機に高比良さんはNPO法を作るために奔走した。NPO法は議員立法でつくられたが、法案づくりの過程には文化芸術や福祉や国際交流や分野での民活動をしてきた

人々が深くかわった。その意味で市民立法ともいべき、異色の立法過程をへたのだった。このとき高比良さんは15日も国会に足を運び、国会議員とともに熱心に知恵を出し合った。またこのときに、芸術だけでなく福祉や環境に関わっている人たちと手を結ぶようになった。そして小山内美江子さんや、堀田力さんたちとNPO事業サポートセンターを建ちあげた。

つくるのが大事であると身をもって体験している。財政基盤を確立するために事業基盤をつくることである。

そこで今年はじめて、国家予算のNPO関連のものについて各省庁に対するヒヤリングを実施した。政府は3年前に雇用対策として緊急地域雇用特別交付金を計上したが、平成14年度からそれをさらに大規模にした緊急雇用創出特別交付金を組んでいる。しかしその内容についてちゃんと知っている市民はごくわずかである。どういう事業にどういうかたちでお金が下りる





かを自分たち自身が知って  
 おこうというわけでヒヤリ  
 ングを実施したのである。  
 実は石川県でもわたしが  
 コーディネイトして高比良  
 さんに来ていただき、NP  
 O関連の事業の国家予算に  
 ついて話してもらおう場をつ  
 くった。そのときに石川県  
 が関わるNPO関連予算や  
 事業について県庁の6つの  
 課の課長さんから話を聞く  
 場もつくった。わたし自身  
 これからも各地のNPOと  
 行政のより良い関係つくる  
 ために、少なくとも年に1  
 度は開催したいと思ってい  
 る。

やらなければ  
 ならないことが  
 つぎつぎと出て  
 きて、体がいく  
 つあっても足り  
 ないくらいだと  
 高比良さんは言  
 う。国家予算の  
 事業項目を広く  
 国民に伝えるこ

子どもがかける 子どものための電話



フリーダイヤル はなぞー コール  
**0120-873-506**  
 毎週 金曜日と土曜日  
 夕方4時～夜10時まで

チャイルドライン  
 いしがわ



子どもがかける子ども専用電話【チャイルドライン・いしがわ】  
 これは、子どもたちの思い悩んでいる事や、不安な気持ちを子  
 どもの心に寄り添って聴いていこうという電話です。いつも、多  
 くの子どもたちから電話がかかっています。  
 この活動は、〈子ども 夢フォーラム〉というNPO 団体が実施し  
 ており、子どもたちのニーズにあった活動を実施していくために  
 も、NPO の形態はそれに柔軟に対応していけるものです。

ともそのひとつなら、企業  
 とのコラボレーションもそ  
 のひとつだ。いま力を入れ  
 ているテーマの一つが子ど  
 もNPOセンター。これか  
 らも子どもたちと共に社会  
 をつくっていききたい、高比  
 良さんはそう思っている。



自治体はどうささえるか？

## 女性のエンパワーメント

中央大学 広岡ゼミ  
広岡守穂

昨年9月、わたしのゼミの合宿で山口県へうかがった。テーマは女性のエンパワーメントに関する事例研究。山口県はいちはやく男女共同参画推進条例を制定した自治体である。それ以前から女性の起業支援に力を入れてきた。自治体がどういうかたちで女性のエンパワーメントをおこなっているか、その実態を实地に見聞したかった。

以下は今年3月にまとめられたゼミ論からの再録である。

山口合宿の報告は「2001年9月11日、後に世界の歴史に残ることとなったその日を私たちは忘れることが出来ない」という言葉ではじまっている。なんとアメリカ同時多発テロが起こった日の翌朝に、わたしたちは山口を訪れたのだった。報告には「世界中が前日の出来事に騒然とする中、予定通りに空港に集まり、心落ち着かせるべく喫茶店に赴く」と続い

ている。ちょっと大袈裟な書きぶりにも思えるが、たしかに9月11日は世界中を震撼させた日だった。こういう合宿の行程に関するパートもそれはそれで面白いのだがここでは除く。かなめの部分だけを収録する。

再録したレポートは5本。最初の「山口県の女性の起業に対する支援」「山口県の男女共同参画政策」「やまぐち県民活動支援センター」の3本は県の取り組みに焦点を当てたものであり、後の「NPO法人山口まちづくりセンター」「洋菓子工房『ゆーたん』」の2本は市民活動を扱ったものである。学生だから経験と知識はまだまだ足りない。だから不十分なところが目立つが、市民と行政の相互関係の中から、女性のエンパワーメントをどうすすめるか、そのことをいろんな角度から考えてみたい。

自治体はどうかささえるか？

## 山口県の女性の起業に対する支援

相原伸郎

伊藤克浩

### 1. やまぐち女性起業家スクール

新産業振興課は2000年4月1日に工業振興課から名称を変更した。この名称変更は、厳しい景気・雇用情勢に対応するため、山口県商工労働部を組織改変し、中小企業対策を一層強化するのが目的であった。組織としては創業支援係、新事業支援班、技術振興班、工務系の4つの組織からなっており、わたしたちが注目する女性起業家支援を行っているのが創業支援係だ。

山口県の女性起業家支援の始まりは、行政からのアプローチだった。地域の既存産業の成長の限界を、新しい産業を興し新たな雇用を生み出すことで打開しよ

うとした。女性のチャレンジが、地域の産業をもっと魅力的なものにするきっかけにならないかという思いから、1992年に山口県はWWBジャパン(Women's World Banking/Japan)と協力提携し「やまぐち女性起業家支援塾」を始めたのである。

開始当時はまだ「女性起業家」という言葉はあまり知られておらず、不安の中での企画・予算化だった。

県が女性をターゲットにした理由は何だったのだろうか。「やまぐち女性起業家支援塾」を始める以前に、県は性別を問わない起業家のための講座を開いたことがあった。しかし、その講座の後に実際に起業した人は、女性よりも男性の方が多かった。しかも開業して





広岡ゼミ合宿に参加しました

講初日の熱気に、啞然としたという。後に、講座の組み立てを変え、内容を充実し、名称も「やまぐち女性起業家スクール」に改めた。

女性の起業支援の実績を数字でみてみよう。1999年度までに、受講生は877人、起業した人（経営

も、山口県内の開業率は全国と比べて低かった。そこで女性の起業支援に力を入れてみては、という発想が生まれた。

女性起業家支援と銘打って実際公募してみると、問い合わせと申し込みの多さにまず驚いた。さらに開

改善を含む）は、150人を超えた。事業内容を見ると、女性の起業は、ビジネスを通じて生活価値の実現や、福祉・環境・地域おこしといった社会的な課題解決など多様であり、女性の社会進出と産業の魅力アップとともに役立っていることがよくわかる。たとえ小さな取り組みでも、いずれ私たちの生活と社会のあり方を大きく変えることにつながっていくのではという期待感が徐々に高まってきているのだ。

なお女性の起業の実情についてかんたんにみておこう。わが国では、家庭内における家事、育児、介護などを主として担っているのは女性であり、それゆえ女性が起業する場合は家庭生活との両立が問題となるケースが多い。実際、女性が起業するのは、育児等が一段落し比較的時間に余裕ができる時期、年齢にして40歳代が最も多い。

女性が起業する業種としては、小売業、サービス業、飲食店が多く、具体的には、菓子・パンの小売りや喫茶店、趣味の教室経営など生活感覚や女性ならではの視点を取り入れたユニークな「生活価値実現型」の事業展開が多く行われてきている。男性に比べて規模は小さい。なお起業に際しては初動資金の融資を受けることが多いが、女性起業家の場合、きちんとまじめに



返済するのではほとんど焦げつくことがないといわれている。

## 2. これからの課題について

このように見てくると、女性起業家支援はうまくいっているかのようには思えるが、まだまだ多くの課題が残されている。女性の働きやすい環境づくりの一層の促進、多様な事業分野への進出、更にはインターネットの活用や大規模の事業展開ができるような支援体制づくりなどである。

一九九九年には、男女共同参画社会基本法が成立し、中小企業基本法が36年ぶりに全面改正された。この中小企業基本法には、「創業の促進」という言葉が初めて条文に明記され、ベンチャー・経営革新と併せ、独立した中小企業の多様で活力ある成長発展を図ることが政策のメインテーマになってきている。

山口県では、この支援塾の他にも県中小企業制度融資をはじめ、金融機関や商工関係団体と連携して各種の相談事業などを行っている。二〇〇〇年には、「新事業創出基本構想」に基づき、新事業創出のための総合的支援体制（地域プラットフォーム）を新たに整備し、

マルチメディア・環境・福祉と医療・生活文化関連の4分野を重点分野として、中核的支援機関（財団法人やまぐち産業振興財団）を中心に各支援機関が連携を図りながら各種の支援策を総合的に展開していくそう  
だ。

女性の起業の背景には、サービス産業が経済活動の主軸をしめるようになってきたこと、少子高齢化の一層の進展に伴い女性が多様な分野へ進出する機会が増えてきたこと、などが挙げられる。なにより女性の就業意識そのものが変化しており、自己の能力を生かし、仕事を通じて自己実現したいという欲求が高まり、自ら起業することを希望する女性が増加していることも  
起業の背景の一つである。

女性の起業は、女性の社会参画を促す多様な働き方の選択肢の一つである。また女性の起業は地域経済活性化の牽引力でもある。そしてそれによって女性の起業は、魅力ある産業社会の形成と男女共同参画社会の実現に寄与することになる。女性の起業に寄せられる  
期待は大きいのである。

あいはらのぶお  
いとうかつひろ

自治体はどうかささえるか？

## 山口県の男女共同参画推進条例

鈴木充生

鈴木貴之

高橋祐二

### 1. 山口県男女共同参画推進条例

山口県は東京都男女平等参画基本条例、埼玉県男女共同参画推進条例に続き全国の都道府県で3番目に、地方では初めて男女共同参画推進条例を制定した自治体である。

まずこの県男女共同参画推進条例とは、どのような条例であるかをまとめてみたい。この条例の制定の直接のきっかけになったのは、1999年6月23日に公布、施行された男女共同参画社会基本法である。とくに同基本法9条「地方公共団体は、基本理念に則り、男女共同参画社会の形成の促進に関し、国の施策に準

じた施策及びその地方公共団体の特性に応じた施策を策定し、及び実施する責務を有する」という趣旨を受けて、同条例は2000年7月11日に公布され、同年10月1日より施行された。20条からなり、さらに前文と附則がある。前文を置くか否かについては賛否両論あったらしい。条文に前文が設けられていることはあまりないからである。あえて前文をつけたということは、同県の男女共同参画への意気込みの表れといえよう。

次に条例の内容について触れたい。山口県男女共同参画推進条例は大きく3つのパートに分けられる。

第1のパートは、男女共同参画の推進についての基



本理念である。この基本理念は6つの柱からなっている。それは、

1. 男女の人権の尊重
2. 社会における制度または慣行についての配慮
3. 施策等の立案及び決定への共同参画
4. 家庭生活における活動と他の活動の両立



県庁にて男女共同参画政策の聞き取り調査

5. 生殖に関する自己決定の尊重及び健康への配慮

6. 国際社会の動向の勘案である。

このうち「5. 生殖に関する自己決定の尊重及び健康への配慮」以外の5つの

基本理念は男女共同参画社会基本法の基本理念と一致している。

第2のパートは、県、事業者、県民の責務。県の責務は、基本理念に則り、男女共同参画に関する施策（積極的改善措置を含む）を総合的に策定・実施することである。事業者の責務は、基本理念に則り、男女共同参画の推進に自ら努めることであり、県と共に男女共同参画を推進することである。県民の責務は、基本理念に則り、社会のあらゆる分野において男女共同参画の推進に寄与するように努めること。セクシャル・ハラスメントや男女間の暴力的行為を根絶するように努めることである。

第3のパートは、施策の基本となる事項である。この事項は主に8つからなっている。それは、

1. 基本計画
2. 市町村への助言等
3. 県民の理解を深めるための措置
4. 教育・学校の振興
5. 事業者の報告
6. 苦情の申し出の処理
7. 相談の申し出の処理
8. 男女共同参画審議会」となっている。

## 2. 条例制定による施策

ここまで条例の内容について見てきたが、この条例によって何か変化が起こったのだろうか。それについては前述の施策の基本となる事項との関連の具体例を挙げて説明する。

「3. 県民の理解を深めるための措置」について、同県は毎年十月を「男女共同参画推進月間」とし様々なイベントを開催するようになった。2001年度は10月21日（日曜日）に山口県男女共同参画推進条例制定1周年記念シンポジウムを開催した。会場は山口県婦人教育文化会館であった。また、街頭キャンペーンを宇部市、新南陽市、長門市、阿東町の4市町で行い、啓発物品や月間チラシを配布した。さらに、男女共同参画推進キャラバンを組んで県と市町村長とのメッセージ交換や意見交換の機会を設けた。これは10月24日に小野田市と平生町、三十日に徳地町と阿武町で開催された。

「7. 相談の申し出の処理」は基本法の「苦情処理」に当たる部分で、条例のかなめの部分のひとつである。これについては条例19条で、男女共同参画を阻害する

ような人権侵害に関する事業者や県民からの相談を適切に処理することが規定されている。この条文により、同県では本年四月、男女共同参画センターを設置した。同センターは県庁内にあった「やまぐち男女共同参画相談室」とシェルター機能も果たしていた「山口県女性相談所」の相談部門を統合して前述の山口県婦人教育文化会館に置かれた。シェルターは現在同センターとは別の場所に移転している。この男女共同参画センターでは、夫婦や家族の問題、セクハラやパートナーからの暴力などで悩んでいる人の相談に無料で乗っている。一般相談の他に、弁護士・医師・臨床心理士による専門相談も実施されている。

## 3. 県庁の男女共同参画は？

自治体は地域社会の模範となるべきである。だから男女共同参画をすすめる条例をつくったなら、当然自治体が先頭に立って男女共同参画に取り組むべきである。というわけで条例から少し離れて、山口県庁自身の男女共同参画はどうなっているのだろうか。

県庁内での人事などで男女の格差はないか尋ねてみた。現在は、女性でも管理職など重要なポストを任さ



れる機会が増えている。しかし、せつかく重要なポストに起用しても、女性に若いうちから重要な仕事を任せていかなかったために、女性自身が戸惑うことや、女性自身の能力が追いつかないこともあるという。

これからは、若いうちから将来を念頭において教育する必要があるのではないだろうか。いままで女性に重要な仕事を任せてこなかったのに、男女共同参画の気運の盛り上がりにあわせて急きよ体裁だけ整えてみたというのでは困る。

また幹部職員つまりは年配の職員の中にはまだまだ男女共同参画について意識の低い人がいるのも事実だという。「女性に管理職を任せるなんてとんでもない」といった気風がなくなりたい。県庁内にも抵抗勢力はあるようだ。反対にお茶汲みや掃除などは女子職員だけに頼みっぱなしではなく、みんなでやろうという動きもある。

あとで県民活動支援センターの方（女性）に、「女性にとつて」山口県庁は働きやすいですか？」と尋ねると、「働きやすいですよ」というお答えが返つて来た。かなり職員の中にも認識のずれがあるようだ。

その他にも男子校を共学にしようとする動きに対して男子校のOB自身が反対しているなどのエピソード

も伺えた。山口県庁自体も男女共同参画を進めている最中で暗中模索している様子がかがわれた。

県庁で話を聞くかぎり、どうしても行政主導で行われているという印象が強くなつてしまふのは仕方がないことかもしれない。だが実情はどうなのだろうか。話をうかがつた県庁職員のかたによれば、山口に限つたことではなく地方はどうしても行政に比べて民間の人々の力が相対的に弱く、NPO法人や市民団体はまだまだ力が弱いのが現状であり、行政主導になるのも仕方ないかもしれないことだった。

男女共同参画は、現在はもちろん、これからも重要な問題であるが、市民団体が何か行動を起こそうとしても、ある程度組織力や財政力がしつかりとした団体でなければ効果的な活動をしていくことは難しいかもしれない。だからといって行政からの一方的な押しつけの政策ではやはり市民はついていけない。男女共同参画社会を実現し、社会に根づかせるには、行政によるリーダーシップに並行して、市民の草の根のうごきがなければならぬのではないだろうか。

すずき みつお

すずき たかゆき

たかはし ゆうじ

自治体はどうささえるか？

## やまぐち県民活動支援センター

佐藤貴子

土門未央

### 1. NPO支援は市民のエンパワーメント

福祉、まちづくり、環境など、普段の生活に関わってくる問題を、行政に頼るばかりでなく、自らの力で解決していくこうとする人々が増えている。1998年には特定非営利活動促進法（NPO法）が成立し、市民活動は社会を作る重要なファクターの1つと位置づけられるようになった。そして民間営利団体（株式会社など）や行政に対して市民の感覚に密着した立場からの提言を行う主体として、また企業によるサービスと行政によるサービスの穴を埋める主体として、NPOの役割に期待が高まっている。

市民活動が、福祉など従来行政が一手に引き受けてきた

分野で活躍していることもあり、行政との関係は特に重要視されている。行政とうまく連携を取りながら、いかに市民により良いサービスを提供できるかが課題となっている。

しかし、行政によつては、その活動をあまり高く評価しない場合もある。団体によつては行政の批判に終始していたり、政党色や宗教色の強いものもあり、市民活動をすべてよしとするわけにはいかない事情があるからだ。さらに公益のためという看板を掲げていても、それは名ばかりである場合もある。また市民活動がまだ十分に浸透していない現在では、社会的信用としての法人格を得られるだけの組織力を持つ団体はそれほど多くない。



以上のような面もないわけではないが、実際には本当に公益を目的として頑張っている団体に限って、行政の壁にぶつかり、活動場所や金銭面で苦勞し、十分に力を発揮できていない。わたしたちは、ゼミを通して市民活動を行っている現場の声を聞いてきた。その中には、行政の対応の悪さに不満を抱く声もあった。そのような話を聞くたびに、行政と市民活動のよりよいパートナーシップとはどうあるべきなのかを考えさせられた。

市民活動の声だけでなく、行政側の考えも聞いてみたい。私たちは今回、山口県庁の職員の方々から話を聞く機会を得ることができた。山口では、行政として市民活動にどのような対応をとっているのか、市民活動との連携をどのように考えているのか。行政と市民活動のパートナーシップのあり方を考えてみたい。

## 2. やまぐち県民活動支援センターとは

### (1) 設立目的

やまぐち県民活動支援センターは県社会福祉会館の4階にある。1999年10月1日に開所された。公設公営の施設としては、全国で5番目であった。

「私が主役 あなたも主役 みんなのパワーが県民活動」

をキャッチフレーズに、県民、企業、行政のパートナーシップによる新しい時代の県づくりに向けて、まちづくりなどのコミュニケーション活動、NPO活動、ボランティア活動などの県民の自主的・主体的な活動を支援するための拠点として設置された。

山口県には、1999年11月末時点で、1045団体の県民活動団体があるとされている。そのうち県民活動支援センターに登録した団体は466団体（2000年9月末現在）。またNPO法人格取得団体は49団体である。やまぐち県民活動支援センターはこれらの団体から情報を集め、山口市内の県民活動の状況を把握し、HPや情報誌で紹介している。

### (2) 支援体制

大学のゼミ教室ほどの広さの部屋には、ミーティングを行うためのテーブル、ホワイトボード、テレビなどの他、ロッカー、パソコン、印刷機などがある。県民活動に関する図書や雑誌、山口県内の市民活動団体のチラシを見ることもできる。センターに利用登録をしていれば、いつでも気軽に利用することができるようになっていく。

このような物質的な面からのサポートだけではなく、センターでは、県民活動を推進、バックアップするための



広いセンターで 気軽にご利用を

様々な企画も実施している。

具体的には、県民活動交流サロンの開催、

県民活動出前

アドバイザー

の派遣、県民

活動リーダー

の養成講座、

NPO法研修、

NPO法人サ

ポート融資制

度である。以

下にその中身

を説明する。

県民活動に関する専門的・実践的な指導や助言を行うアドバイザーを団体に派遣する。講座内容は税務・会計や広報などの組織のパワーアップを図るものが中心である。アドバイザーはNPO団体を運営している人から大学教授まで、その内容に応じて、様々な職種の人たちが携わっている。

アドバイザー派遣経費（報酬・旅費）については、1団体あたり1年度1回に限り、センターが負担する。

・ 県民活動リーダーの養成講座

県民活動団体のリーダー、もしくはリーダーを目指す人を対象としたセミナーを開催する。ゼミ、事例発表、講義、実習などを年5回の実施で消化していく。受講料は無料である。

・ NPO法研修

NPO法の普及・啓発を目的とした研修会であり、県内数箇所で開催されている。参加費は無料だ。

・ NPO法人サポート融資制度

県内に事務所を持つNPO法人を対象に融資を行う。融資対象資金は定款に定める事業に要する設備整備資金であり、融資限度額は1000万円、融資利率は年2.1%となっている。

・ 県民活動交流サロン

活動団体相互のネットワークを図ることを目的として、気軽な話し合いの場としてのサロンを県内8ヶ所で開催。その企画・運営は県内で募集された県民活動団体に委託される。

・ 県民活動出前アドバイザーの派遣



### (3) 役割

センターは、まず、物質的な面からの支援を行っている。印刷機やコピー機を気軽に利用することが出来るスペースがあるのは、活動を進める上では、かなり助かることである。

しかし、このように県民活動のための設備が整っている施設は県内にはまだ少ない。印刷機を求めて他の地域からわざわざ足を運ぶ人もあり、活動を行なっている人たちからは、もっと身近にこのような施設がほしいとの要求が出ている。その声にこたえるため、2001年度中にこのようなセンターを県内に6ヶ所開設することが決まっている。だが施設が設置されたからといってそれらがすべて有用なものであるとは限らない。この種の施設は条例で用途や目的が定まっていることが多く、自由度が低いので活用しにくいという声の中にはあるという。

センターのもう一つの役割は、現存する団体の組織力を高め、また、今後の団体設立を促すことも視野に入れた企画を県民のアイデアをもとに作り、それを実施できるようにすることである。

行政が行うことで、参加費や受講料を無料にすることが可能になる。また、行政の広報に載せることによって、それぞれの団体は活動を県全体に知らせることが出来る。物

質的な面だけでなく、政策の上でも支援を得られることによって、県民が自主的な活動を実行しやすい環境になっていく。

### (4) 団体との距離

しかし、行政と団体が近づきすぎるのも考えものである。県民活動の団体は、行政に対して政策の不備を訴えるというアドボカシー（意見表明）機能も持つのであり、あまり行政との癒着を強めたら、その本来の機能が果たせなくなってしまう。

これは、県民活動支援センター自身が一番気にしていることでもある。行政は組織面で力を持っており、ついその権力を振りかざしてしまいがちになるからだ。実際に、「行政はやり過ぎだ」と批判を受けたこともあるという。

この点について、県民活動に対する姿勢として「なるべく行政色を出さないように気をつけている。県がどこまでやるかというのも、毎回県民の意見を聞きながら、また、市町村の動きを見ながら、慎重に決めていかなければならない」とおっしゃっていた。

サポート融資制度において融資先を決める際にも個々のケースを想定しながら、十分な検討をしているという。なぜなら、下手をすると「助成金が団体の力を弱くする」か

らである。非営利といっても、決してお金を儲けてはいけないということではない。団体の活動によって収入を得、その収入を団体内で運用するということである。自らの力でお金を集め、それを運用できるかどうかで組織の強さが計られる。県民活動発展のためには、団体と行政が適切な距離を保つ必要がある。そのためにも融資制度は慎重に運用されなければならないのである。

市民活動と行政のパートナーシップについて、県庁の担当者的かたが強調していたのは、対等なパートナーシップを作るということである。しかし、行政は組織の面で力を持つている。そこをどのようにしていくかが問われる。行政が県民を積極的に受け入れ、対話を重ねることで、行政がやるべきこと、民間がやるべきことを明確にすることが大切である。その視点を基本に据え、行政と市民活動がよりよい社会を作るといふ共通の目標に向かって、相互に足りない機能を補いあい、共に高め合っていく関係を構築することが必要である。

やまぐち県民活動支援センター

<http://www.kemin.pref.yamaguchi.jp/>

さとう たかこ

どもん みお

### 校歌はこうでなくちゃね

神奈川県大磯町の町立国府（こくふ）中学校では、男女平等教育実践校に指定されて、校歌の見直しに取り組みました。もともとの校歌は1952年につくられました。

「男子は励み、努め、名を立てるべし」「女子はたおやかに、うらかに、清らかに生きよ」とうたっていました。たしかに男女共同参画の感覚からすると違和感があります。誰から言うともなく新しい校歌を作ろうということになりました。そこで1999年に公募や、みんなの協力によって新しい歌詞がつくられました。新しい校歌には「わたしたち」「仲間」という言葉が使われています。あなたの卒業された学校の校歌はどうでしょう。みんなで作る新しい校歌が必要な学校も多いのではないのでしょうか。





自治体はどうささえるか？

## NPO法人山口まちづくりセンター

小川知恵

土屋理英子



「NPO法人山口まちづくりセンター」の建物は1919（大正八）年に建てられた散髪屋を改築した洋館風の建物

### 1. 山口まちづくりセンター

山口まちづくりセンターが創立されるきっかけとなったのは、山口市の委託事業であった「住宅マスタープラン」である。まちづくりセンターの活動は設立当時から建築士が中心になって行っていたが、この活動を継続していくためには組織を作った方がよいということで、「山口すまいまちづくりセンター」を経て「NPO法人山口まちづくりセンター」となった。

センターの名称から「すまい」という言葉を外したのには建築関係以外の一般市民にも開放したいという願いが込められている。多くの人が力を合わせて、こ

れからのすまいづくりやまちづくりをしていくこと、それぞれの人がそれぞれの持ち味を生かして山口を大切にしていくことを目標としている。市と密接であり、公民館とはまた違う「基地」のような役割を果たしているセンターは、利点を生かして官民一体となつたまちづくりを目指している。

山口まちづくりセンターの事業内容の主なものとして、山口型住まいづくりに関する事業(民家再生やハウジングアドバイザーの設置など)や、まちづくり活動の支援に関する事業(市民のまちづくり活動や景観誘導など)、調査研究活動(街の実態調査や民家等調査研究)、学習機会の提供、情報の発信、などを挙げることができる。これらの活動を民家再生部会、山口型住まいづくり部会、町なか住まい研究会、ハウジングアドバイザー部会、やさしいまち研究部会、アートふる山口部会と、部会にわかれて活動している。

## 2. 小山さんの考える山口のまちづくり

小山さん(副センター長)が山口のまちづくりに取り組むきっかけとなったのは、大学進学で山口を離れてから20数年ぶりに山口に戻ってきたときに、彼が眼

にした山口の以前とほとんど変わらぬ姿であった。そのときに小山さんは「いま自分たちが山口を変えないと山口のいいところが残らなくなってしまうのではないか」と考えた。

山口は「歴史や文化が豊富であり、緑が多くてほっとできる」まちである。サビエル記念館や雪舟庭といった観光資源がある。けれども、それをうまく宣伝していなかったり、風情ある町並みを整備できていなかったりして、山口の持つ個性や良さを生かすきいていないのではないか。

そこで小山さんは「山口の良さを生かした、観光客だけの街ではなく、自分たちも楽しめるまちづくりを！」と考え、活動をしている。山口が福岡や広島のように大きな都市に発展することを目指しているのではない。また、ただ古い建物だけを残すというわけでもないし、太秦のように映画のセットのような町を作るといふわけでもない。彼らが目指しているのは「生活感のあるまちづくり」なのである。

## 3. アートふるやまぐちという取り組み

建築士が中心となって作ったセンターのため、部会



には建築士に近い人が多い。だからセンターでは市民との接点を見つけていこうということが課題になつていそうだ。まちづくりセンターは市と密接な関係にあるが、市民の「基地」のような役割を果たしている。

センターが支援しているイベントに「アートふるやまぐち」がある。これは、福岡県浮羽郡吉井町で行われている「筑後吉井の小さな美術館めぐり」をモデルとしたもので、「アートふる」は、アートが「天から降る」「Funi」いっぱい「からつけた名前である。ある地区全体(一般民家、商店、喫茶店、公共施設など約60ヶ所)を大きな美術館に見立てて、それぞれ思い出の品や宝物を公開展示する「小さな美術館」を開く。それを中心として行われる2日間のイベントである。展示場の人々と訪れた人たちが気さくな会話を楽しむのである。

1・未来へつなぐⅡ歴史が香る町に育まれてきた大切なものを再確認し、現代の創意工夫も織り交ぜて山口の未来のために語り継ぐ

2・地域の個性を尊重Ⅱこの場所だから生きる、息づいているものを大切に考えたい

3・手作りⅡそこから生まれる暖かさ、そんな思いを伝えたい

の3点をコンセプトにしており、今年で6回目を迎える。

#### 4. 山口が目指す方向

山口市は、日本で一番小さい県庁所在地である。人口14万人という数字は実に1400年もの間、ほとんど変わっていないのだとか。県庁の近くは緑がたくさんある。わたしたちは県庁の最上階から山口の町並みを見たが、非常に自然が豊かで、私たちが抱いていた県庁所在地のイメージとは随分異なっていた。

発展の結果昔のおもかげを失ってしまった場所がたくさんある一方で、山口にはまだまだ昔のおもかげが多く残っている。小山さんは、古い建物などを過去の遺産として受け継いでいくことは大切だが、それだけではなく「生活感のあるまちづくり」を目標にしているという。交流人口を増やすためには、観光を促進するだけではなく、住んでいる人たちがすなわち市民の交流で活性化することが大切だとおっしゃっていた。

その気持ちは「アートふるやまぐち」にも表れているだろう。古いまち筋の中でイベントを行えるか、新しさを見つけれられるか、はプロデュースの方法次第だ

## 特集

とおっしゃっていた。

面白いと感じたのは、「楽しいこと」を深く考えずに  
どんどん行動していくのが大切だという小山さんの言  
葉だ。たとえば、雪舟は山口で死んだ「らしい」とい  
う情報がある。不確かな情報でもそれを利用すること  
で、まちの活性化につながるイベントにすることがで  
きるという。山口をプロデュースするのが、山口まち

づくりセンターであり、山口を自分たちのまちとして、  
自分たちが住みやすいまちにしようとしているのだ。

山口まちづくりセンター

<http://www.c-able.ne.jp/~clayon/>

おがわ ともえ  
つちや りえこ

自治体はどうささえるか？

## 「洋菓子工房 ゆーたん」

### 1. 洋菓子工房『ゆーたん』

わたしたちはやまぐちの女性起業家の例として、洋  
菓子工房『ゆーたん』を訪問した。『ゆーたん』とはど

ういうお店か、そして起業をされた江川裕子さんにつ  
いて、また、彼女をバックアップした県の体制につい  
て書いていきたい。

洋菓子工房『ゆーたん』は山口県山口市にある。江





ゆーたん店主の江川裕子さん

川裕子さんによって開かれた安全な素材を使った洋菓子製造・販売するお店である。『ゆーたん』の外観は、全体がログハウスの木のつくりで、明るさや温かさを感じさせる。わたしたちが訪問したお店は、二〇〇〇年七月にリニューアルオープンした店舗である。

『ゆーたん』の特徴は、手作りで無添加のお菓子だ。江川さんが手作りで無添加のお菓子作りにこだわる背景には、以前ホテルに勤務していたころに感じた、見

た目のはなやかさで勝負するケーキや添加物の入ったお菓子作りへの拭い去れない疑問があった。「赤ちゃんや子どもでも安心して食べることができるようなお菓子を作ろう」と江川さんは心に決めた。

現在『ゆーたん』では、いちこのショートケーキが250円、クッキー類も100〜200円と手頃な値段になっている。(帰り際、わたしたちも各自お菓子を購入した。帰京後、口にしたその味は、やはり手作りの丁寧な味がした)。店内にはクッキーを小さな袋にバラ売りにしたり、お土産用にバスケットや箱詰めのものがあり、ラッピングなどの工夫もされ、女性ならではの気配りが感じられる箇所もあった。クリスマスやバレンタイン・デーなどにはフェアを行い、とても盛況だ。しかし、それゆえある年のクリスマスには注文を受け過ぎてしまい、手が回らなかったこともあるという。

『ゆーたん』の運営面では、自ら「人・もの・お金」を管理していかなくてはならない苦労もある。特に「人」という点について、『ゆーたん』には、江川さんの他に4人のパートの方がいるが、お菓子の製造は江川さんが中心になって行う。スタッフは全員女性である。スタッフに対しては、「同性・同世代だからこそ言



いやすいこともあれば、ときには言い争いもある。スタッフの管理には非常に気を使う」とおっしゃっていました。なんといつでも「スタッフこそ財産」なのである。

労働条件について、お店の営業時間は朝10時から夕方6時までとなっているが、お菓子の製造のためには、早朝6時から仕事を始めたり、仕事が深夜に及ぶこともある。その点は、さいわいにも江川さんのパートナーの理解があり、家事の面でも協力的であるという。今後は育児との両立が課題になるとおっしゃっていた。

将来は、お店をさらに大きくすることを念頭に、郊

外のゆったりとしたスペースにお年寄りを呼べるようなお店作りが目標だと言う。現実を見据えながら着実に前進しようとする姿勢は開業当初と変わらない。

## 2. お店を経営する江川裕子さんとは

江川裕子さんは「やまぐち女性起業家スクール」の卒業生である。事前にお店紹介のHPなどを見ていたので、さぞかしやり手の女性だろうと思っていたが、実際にお会いした時に感じた印象は「かわいい人」というものだった。小柄な彼女。赤いバンダナに赤いエプロンがとても似合っていた。でもやはり起業家である。「どこにそんなパワーがあるのだろうか？」と思うほどパワーを感じさせる女性だった。

彼女の経歴を簡単に紹介すると、彼女は調理の専門学校を卒業して、一九八九年、神戸のホテルに入社する。そこで製菓部に配属されたことがお菓子との出会いだった。彼女には仕事を続けたいという思いはあったが、「3年経ったら帰ってくる」という両親との約束のため、4年後に渋々ながら退社し、山口に戻ってきた。帰郷後は県の税務課に務めていた。同じ頃、偶然知ったやまぐち女性起業家スクールにも通い始めた



いう。

「昔から人と違うことがやりたいと思っただけです」と江川さんはいう。彼女が起業という選択肢を選んだのは必然だったのかもしれない。しかし、親や知人は反対したそう。それでも彼女を動かしたものの、それは「子どもや赤ちゃんでも安心して食べられるようなお菓子を作りたい」という願いだった。

お店は一九九三年の開業以来、順調にきている。8畳のお店で始めた『ゆーたん』だが、二〇〇〇年には大きな店に新装開店をすることもできた。県の支援を受けながら起業したが、江川さんの絶え間ない努力でここまでできた。始めた頃の頃は、「習ってきたことと実際にやることの違い」に戸惑っていた。今は「お客様を飽きさせないように常に新しいものを作っていく」という課題がある。「お客様のために仕事に精を出していますよ」と微笑みながらおっしゃった。そもそもお店を軌道にのせることが並大抵のことではないだろう。そのような中でひたむきに努力する彼女の姿勢に心をうたれた。

いまの夢は店内で買ったケーキなどを食べられる喫茶コーナーを作ることだそう。しかし、今すぐに融資を受けて作るというのではなく、返済の目途がつく

ようになってから作りたいとおっしゃっていた。

一歩一歩着実に前進している彼女がとても輝いて見えた。これからはがんばって欲しいと願うとともに、逆に勇気をもらったように感じる。

江川さんのお話の中でパートナーのお話が出てきた。パートナーはサラリーマンでお店を手伝うということではない。家の中でも家事などはあまりしないとか。でも夕飯が遅くなっても怒らないし、うまく時間を合わせてくれる。そんなパートナーのことを江川さんは「私のやりたいことをさせてくれる人」と呼んでいた。

### 3. 『ゆーたん』を支えた

県のバックアップ体制について

山口県の「女性起業家支援塾」は一九〇〇年に県とWWBジャパンが提携して始めた講座である。『ゆーたん』代表の江川裕子さんは、この女性起業家支援塾の一期生であり、起業第一号となった人である。新産業振興課の方に聞いた「女性起業家支援塾」についての話と、江川さんから聞いた話は、それぞれ支援する側、される側の思いが表れていて興味深かった。

県庁の支援塾開催の背景には、地域産業全体の活性化になればという期待がある。不況の影響もあり、一九九六〇一年の全国平均での事業所ベースの開業率は4.1%、廃業率は5.9%（一九九六〇一九九九年）と開業率が廃業率を下回っている。この差は山口県ではさらに広がって、開業率3.7%、廃業率5.6%と、全国よりも厳しい状況となっていることがわかる。全国どこの都市でも中心商店街の沈滞が深刻になっているが、実際、私たちが県庁を訪問した後、宿泊先のホテルまで移動するときに通ったメインストリートもあまり元氣そうにはみえなかった。このような状況から若者の県離れも進んでいて、県全体の活気が失われるのだと県庁の方は言っていた。

この事態を食い止めようとスポットが当てられたのが女性起業家に対する支援活動である。女性の社会参画を促す多様な働き方の一つの選択肢として、また、その経済活動を通じて地域経済を活性化させる一つのきっかけとして注目された。女性の起業が男女共同参画社会の実現と、魅力ある産業社会の形成に寄与することが期待されているのだ。

「女性起業家支援塾」では、起業、事業経営に関する知識やノウハウの提供を行っている。将来一年間を

目標に起業するようスケジュールが組まれているのが印象的だ。具体的には、大きく分けて5つのステップでシミュレーションをする。まず、メニュー大綱・店のイメージ・対象顧客などの基本方針の設定だ。どんな商品を作り、どんな人に買ってもらいたいのか、また、どんなお店が好ましいかを考える。

それから市場調査をする。例えば周辺の通行者の量はどれくらいか、また年代層や所得層はどうなっているか、さらには、商圈としてどの位離れた所からお客様が買い物しに来るかといった点、物件条件として店舗あるいは事務所がどこにあり、どの位の広さで家賃がいくらなのかといった点を想定する。また、同業店があるかどうか、異業種の場合は自分の商品を買ってくれそうな客層が来るお店かどうかチェックすることも含まれる。

第3に、売り上げ予測である。1日の売り上げとして1日に何人の来客があり、実際に買ってくれる人が何人いるか（購買客数）、またそのお客様はいくら買ってくれるか（客単価）を予想する。そして、1日の購買客数と客単価をかけると1日の売上金額が出るといふわけだ。

第4に、損益と投資計画である。事業を始める際に



は、店舗や不動産などの内装・設備・宣伝費・運転資金などが必要である。これらの必要なお金を割り出すことをここで行う。

最後に、資金計画である。初期投資に必要なお金をどうやって集めるか、自分で出す、家族から出してもらう、共同経営者をさがす、金融機関から借りる、株主を募る、仲間から集めるなどの方法がある。スタート時に無理のない条件で始めるのが肝要であり、返済計画もあわせて考える。

江川さんはお店を始めるにあたって、山口県起業資金貸付制度を利用したという。それに、自己資金を加えてスタートした。開業したときは、女性起業家スクールの一期生であることから多くの注目が集まり、テレビの取材も来て、それが大きな宣伝になったという。その後も客を減らすことなく順調に売り上げを伸ばし、店舗も広い所へ移転した。

『ゆうたん』には、女性起業家支援塾のパンフレットが置かれていた。彼女自身も偶然この講座を知ったことから、自分のお店が他の人のきつかけになればということだろう。こうした市民同士のネットワークの力は大きい。県主導から始まった地域産業振興の政策が、着実に実を結びはじめていることを実感した。夢

を見ているだけではお店は成り立たない。「体力が資本です」と言い切り、一人で店に出すお菓子を全て作るという江川さんは小柄な方なのにとても大きく見えて素敵だった。

むらかみ ゆういち  
よねやま あずさ  
おおき あゆみ



# バン格拉デシユと子どもたち

中谷 美世子

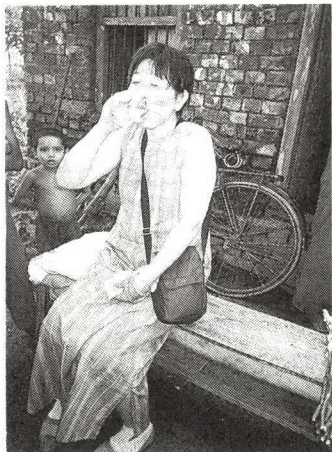
第3世界ショップ・アジール

ダツカ空港では、ストリートチルドレンが車に群がりドアを開けて何かをねだる。この子たちは家族と一緒に住んでいるが、昼間は物乞いをして大半の時間をストリートですごす。ゴシユは「これも彼らの仕事なのだ」という。

道路では乳飲み子を抱えた母親が、渋滞で停まる車の間をすばやく歩き回り窓をたたいて物乞いをし、別の父親は、やせ細って腕が変形した子を見世物にして食料をねだる。みな生活のためだ。生きていく姿が、せつない。

リキシャ（人力車のようなもの）が何十台もひしめき合って走る横をパジエロがクラクションを鳴らしっぱなしで割り込んでいく。乗用車はトヨタか三菱、トラックは日野と日本車ばかり。排気ガスとほこりとクラクションの音で街が喧騒としていたのは、私が初めてバングラに着いた日のことだった。

私がジャパントでホームステイをしたのがきっかけで、もっと学びたいというバングラデシユの学生に少しでも役に立ちたいと「金沢・バン格拉デシユ友好基



ココナツジュースはうまい  
コップが1つなのでまわしのみ

金」をつくったのが4年前、平成10年のことだ。15人の学生たちに、奨学金という形で授業料を贈ることからスタートしたこの活動は、延べ63人の中高生を奨学生とするまでになった。





赤ちゃんを抱く中谷さんと南扶允子さん ダッカで

Bangladesh の金利は 8%、12% だ（うらやましい）。それでこの基金は元金（平成 14 年 3 月現在 71 万円送金）を使わずに利子だけで運営されている。

実際どのように役立てられているのか見たい、学んでいる学生に会いたいという希望もあり、昨年

（平成 13 年）5 月 Bangladesh を訪問した。

運動を始めるきっかけとなった シュワパン・ゴシシュ氏と、従弟の パルタ・ゴシシュ氏の案内でダッカから 250 km 離れた ジョソール県を訪れた。そこで現在奨学金を受けている学生たちとお茶を飲みながら楽しく語り合うことができた。金曜日で学校が休みにもかかわらず、22 人もの子どもたちが出席してくれた。

男子は襟のある洋服を着て、女子はサリーもしくはパンジャビスーツ（未婚の女性が着る服）といった民族服。男子と女子は別れて行儀良く座り、小さい学年の子は大きい子の後ろに座り、年功序列、男女の区別がしっかり身についているようで、さすがイスラム教信仰 88% を実感した。

おみやげに持っていった文房具

を手に『日本に行ったら仕事がありますか？』に仕事のない現状を憂い、『この奨学金制度はいつまで続きますか？』に「この奨学金の元金がなくならなければこの制度は永遠に続きます」と答えた。そして、子どもたちへの大きな責任を感じると共に、これから少しでも多くの学生に、長期に渡って支援を続けて行く必要を強く思った。『大学に行くことができませんか？』には「希望を持って勉強して欲しい」と答えた。

きらきらと輝く目で真剣に聞く姿に、日本の子どもたちの質問にはない切実な心が見え隠れし、向学心の強さ・働く意欲・学ぶ姿勢を感じた。

質問を受けている最中にバラバラと教室から子どもたちが出て行くので「何故ですか？」と聞くと『お祈りの時間だ』とのこと。神へ



ジョソール学校で

の信仰心の深さにもびつくりした。  
米10kg(350円)・中高生の  
授業料1か月(50円)140円)  
と授業料が主食の米に比べて高い  
のだ。これでは中学校はもちろん  
小学校5年間の義務教育も満足に  
行けない子が大半で、識字率が低

いのもうなずける。子どもたちは、  
家族の生活のための労働力として  
必要なのだから。

パルタは3日間寝食を共にして  
案内をしてくれた。私たちと同じ  
宿泊代金なのに、日本人と現地の  
人の宿泊棟が違うのに差別を感じ、

夜中何度となく響きわたる心地よ  
いコーランの声にやすらぎを感じ  
(いい声なのよ、これが…)、毎朝  
パルタが早起きして町まで歩いて  
買い求めた花束を「グッドモーニ  
ング」と差し出すのに感激し(こ  
んなの50年生きてきたけどはじめ  
て!!)、道路わきのバラック建ての  
屋台の上に牛の首が売られている  
のに驚く。

花束をくれたパルタ、空港でお  
みやげにと高いノクシカタの民芸  
品を買ってくれたゴーシユ、白い  
歯を見せて人懐っこく出迎えてく  
れたゴーシユ村の人々、去年電気

がきて農作業が楽になったと自慢  
する長老、牛が干草を食みのどか  
に歩く(ここでは狂牛病はないな  
あ)、牛の糞を燃料にするため棒に  
キリタンポのようにかため、家に  
立てかけて乾して使う生活感(小  
さい頃に見た風景だなあ)。

私は、大きな澄んだ瞳で白い歯  
を見せて笑っていた子どもたちの  
自信に満ちた笑顔を忘れない。何  
が豊かで何が貧しいというのか?  
二泊三日の短い滞在であったが、  
心豊かな彼らとの交流は、昔、日  
本人が持っていた純朴な一面を見  
たような気がした。

初めて行った海外旅行、私はバ  
ングラデシユが大好きな国になっ  
た。

応援団員募集中

郵便振込口座番号

00760・111968

加入者名 金沢バングラデシユ友好基金



# 広岡守穂の 常住坐臥 9

1

広津和郎という名前をご存じだろうか。若い人で知っている人はほとんどいないと思う。わたしの世代でも、はたしてどれくらいの人が知っているか。

ご存じでない読者のためにというと、広津和郎は文学者である。

一八九一（明治24）年生まれだから、大日本帝国憲法が発布された翌々年にこの世に生を受けたことになる。早稲田大学在学中に葛西善蔵、舟木重雄、相馬泰三、峰岸幸作らと『奇蹟』という同人雑誌をはじめた。そのため彼らは新早稲田派とか『奇蹟』派とかといわれる。

その広津和郎の『年月のあしおと』『続年月のあしおと』が数年前講談社文芸文庫に収録された。いま広津の作

品が書店で手に入るのは、これだけではないかと思われる。岩波文庫に収録された『同時代の作家たち』は、もう手に入らないのではないだろうか。一読、筆の運ぶにまかせて書かれた他愛のない回想と身辺雑記であるが、これがなかなか味わいがあつて面白いのである。広津和郎の作風には作者のありのままの実体験を大切にするところがあり、その点で自然主義の系譜を引いているといえる。

2

広津が在学していたころの早稲田大学には、あの島村抱月がいた。ところが看板教授だった島村抱月はしょっちゅう講義を休んだ。あんまり休講が多かったので、休講掲示板に出講掲示がでるほどだったという。「いい加減な講義

でした」と広津は述懐している。

しかしそう言ったあとが面白い。島村先生の講義はいい加減だったが、途中で脱線して、人間には生活の墮落というものがある。たとえばひとから手紙をもらって、返事を書こうと思っても、ついおびのびになってしまう。すると次の手紙が来て、それにも返事がかけない。こうして負担が積み重なっていく、といったことをぼそりとしやべるのです、と続けている。広津は島村抱月のそんな部分が好きだったのである。

広津は酒はあまり飲めなかったようだが、仲間の『奇蹟』同人の飲みっぷりが凄いい。

ある日広津が相馬泰三の下宿に遊びに行ったら、葛西善蔵と峰岸幸作の二人が頭に包帯をして枕を並べて寝てい

た。どうしたんだと聞くと相馬が、ゆ

うべ飯田橋で飲んだ勢いで二人が喧嘩をはじめ、泥の中を転げ回る大立ちまわりを演じた。雨が降っていたしどうしようかと思っていたら、通りかかった人力車夫が止めてくれたのだと言う。相馬がそこまで話すと、寝ている二人が「あの車夫の顔を覚えてるか。いつペンお札にいかなきゃならんな」などと言いつつ合っていた。

きわめつきは葛西善蔵である。葛西は破滅型の典型のような作家で、わたしなどは彼の小説はすさまじいの一言につきると思うのだが、広津の回想によれば、小説はすさまじくても事実はだいぶ違っていたようである。実生活では葛西はまわりの友人たちにとんでもない迷惑ばかりかけていたが、それが小説の中ではあべこべになってい

て、主人公（葛西）はいつもひどい目にばかりあわされているように描かれたというのである。

たとえば『中央公論』に発表された『蠢（うごめ）く者』では、主人公は下宿で血を吐いて衰弱しきっている。そこに妻が彼をさんざんに殴りつけている。広津和郎はそれを真に受けて葛西の見舞いに行つた。すると下宿では、葛西はほろ酔い気分で雑誌記者相手に怪気炎を上げていた。そして広津を見るなり、抱きついてきて顔をべろべろ舐めた。そして妻はというと、部屋の隅で小さくなっていた。『蠢（うごめ）く者』の中身は大嘘もいところだったのである。

### 3

さてしかし、広津は、ありのままの



実体験を大切にすればかりではなかった。思想や観念が先行するタイプは嫌いだっただが、さりとて思想や観念を無意味なものとして退けたかというところ、一概にそうとはいえなかった。日常的な実感に即した同情心や正義感は強かった。

広津は個人の人格や心理を、社会の圧力との対抗関係でとらえる視点を持っていた。とくに社会の圧力が、ひたむきに生きたいけれども気弱なためにそれができない人間を、いつしかのつびきならない窮地に追い込んでいく姿を好んで描いた。広津はそれを「性格破産者」という人間類型としてうち出して評判になった。

出世作の「神経病時代」ではなまじ学問と正義感があるばかりにうまく社会に適応できないインテリの姿を描い

た。夏目漱石のいう「高等遊民」などと類似の性格を持つ「無用者」の系譜である。

「神経病時代」の主人公は鈴木定吉という若い新聞記者である。小説は定吉がある老婆の自殺を記事にしている場面からはじまる。原稿を清書してい

るうちに、定吉の脳裏にはその老婆の死の様子がまざまざと浮かんできた。老婆はなぜ自殺したのか、その理由を想像しながら彼は8行の記事をまとめた。社会部長は記事を2行にまとめるよう指示した。定吉は苦勞するがどうしても5行以下にはならない。それをいうと社会部長はどれどれ貸してみろと言って原稿を取り上げ、たちまち朱を入れた。帰ってきた原稿は「麻布広尾町内山りつ(68)は今朝四時自宅台所にて縊死す」となっていた。

定吉は意思の弱い青年だった。友人たちの議論を聞いていても、ふむふむと聞いて聞いているだけで、とりたてて自分の意見というものはなかった。ただ物事を自分のハートに弱く感じはした。しかしそれを一個のまとまった意見にするだけの力はなかった。

あるとき一人の酔漢が二人の巡査に組み伏せられているのを目撃した。酔漢の額から真っ赤な血が噴き出していた。それをみて定吉の心臓はぎゅっと縮み、ドキドキと激しくうった。それはこういう醜態をあさましく感じたからではなかった。むしろ「人格の破綻」からくる神経の痙攣のようなものだった。

そもそも妻のよし子とはできちゃった結婚である。定吉自身は結婚する気

がなかったが、子どもを里子に出そうとするよし子は激しく怒り、気のすまぬままに同棲生活をはじめた。まだ籍は入っていない。

とまあ、定吉はこのような男だった。

#### 4

とはいももの、定吉は社会の矛盾や不正義に無関心だったり鈍感だったりしていたわけではない。逆である。人一倍敏感だったが、同時に人一倍臆病

でもあったので、定吉は鬱々としていたのである。その圧力が定吉を「人格の破綻」に追い込んでいた。

たとえばあるとき定吉は友人の遠山から悪所へ行こうと誘われる。定吉はそういうところへ行つたことがなかった。躊躇の末断つたが、自分は金を持っていない遠山はいっしょに行こうと

言つて聞かず、押し問答になった。すつと突然、遠山はいきなりステッキを振り上げて定吉を殴る素振りを見せた。

定吉は潔癖な道徳観の持ち主なのである。しかし気弱なため、それを確固とした意思として他者に伝えることができない。だから定吉はそうしたかという、彼はあわてて逃げ出したのである。そしてそこには、そういう自分を眺めているもう一人の自分がいて、その都度「みつともないな」とか「あれ逃げているぞ」とか、まるで他人をみるでもするように眺めていた。

あるとき大臣のスキヤンダルが発覚して世間は騒然としていた。各紙それぞれ政府攻撃の論陣を張っていたが、ある日突然、定吉が勤務する新聞社は政府擁護に転換した。どうやら社長が

政府から大金で買収されたらしかった。定吉はそんな会社にはとほと嫌気がさしていたが、しかしきっぱりと辞める勇氣もなかった。なんのために、と定吉は自問する。「生活のため」には違いない。しかしそれにしても、自分とはつきりしないのであろうか。どうして明確な意志というものを持てないのだろうか、と定吉は煩悶する。



まったことをくよくよ後悔しているが、子どもは可愛いし、妻子を養う義務を放棄することはできない。そこそこに義務感もあるのだ。

## 5

思わず『神経病時代』の紹介が長くなってしまったが、わたしの言いたいのは広津和郎がリベラルな精神の持ち主だったということである。堂々と軍

国主義批判の論陣を張るとか、理路整然とした体系的な自由主義の正論をぶつといったタイプでこそなかったが、

実際の広津はかならずしも定吉のように優柔不断で小心翼翼とした臆病者ではなかった。定吉のようなタイプが性格破産に追い込まれることのない社会が望ましいのだということを、自由なスタイルできちんと論じた。

「散文精神について」という短い

れども心をうたれる文章がある。これは一九三八（昭和13）年ごろ、講演会での講演の内容のメモをまとめたものである。当時はロマン主義が台頭していた。保田與十郎、亀井勝一郎、林房雄といった人びとが日本浪漫派を旗揚げしたのはちょうどこのころだった。そのロマン主義は日本主義と結びつ

いており、彼らは激烈な戦争賛美にひた走っていく。こういう動きを横目にらんで、広津は語っている。

「どんな事があつてもめげずに、忍耐強く、執念深く、みだりに悲観もせず、樂觀もせず、生き通して行く精神――それが散文精神だと思います。それはすぐ得意になつたりするような、そんなものであつてはならない。現在のこの国の進み方を見て、ロマンティシ

ズムの夜明けだとせつかちにそれを謳

歌して、銀座通りを青い着物や緑の着物を着て有頂天になって飛び歩くような、そんな風に直ぐ思い上がる精神であつてはならない、と同時にこの国の薄暗さを見て、直ぐ悲観したり滅入りたりする精神であつてもならない」

## 6

わたしは広津和郎のリベラルなところが好きであるし、リベラルなところを大切にしたいと思う。

『続年月のあしおと』に、警官の横暴に猛烈に腹を立てたエピソードがみえる。一九三五（昭和10）年ごろのできごとだった。

その夜広津は息子をつれて新宿伊勢丹デパートあたりを散歩していた。時

た。交差点をわたったところで、父子た。

は角の交番の巡査から「おいこら」ともつと悪質なのは、こうである。そ呼び止められた。巡査は息子の方を呼のころ広津は仕事のために新宿ホテルび止め尋問をはじめようとした。広津の一室を借りていた。ある晩、帳場のは自分はこの子の父親だと名乗りを上ボーイがいうには、カウンターのとこげた。すると巡査は、ふん父親か、父ろに刑事が張つていて、いましがた若親がなんだ、あつちへいつてろ、とおいカップルを連れていったという。二そろしく横暴な態度だった。むつとし人が入つてくると、かくれていた刑事た広津がもう少し丁寧にしたらどうかが出ていって「君たち、高いホテル代と抗議すると、巡査はますます居丈高なんか払うことはない。わしがただでなつて「君は警察というものを知る泊まれるところに連れていってやる」と叫んだ。ま。訊問、検束、みな自由なのだぞ」といって拘引していった、というのである。二人はまじめなカップルなのに、

そのころから警官の横暴はますますいけすかない刑事だと、ボーイはしきひどくなつた、と続けて広津は書いてに憤慨していた。こういふところなど、リベラリストいる。たとえば映画をみていたというとしての広津の面目が躍如としているだけの理由で、4、50人もの学生をくんだりである。一網打尽、映画館の前から署まで、並んで歩かせるといったことが行われ

## 7

広津和郎が書いたものを読んでいると、彼が日常生活の一こま一こまの経験を、ごく自然体で正義や公正といった観念に結びつけてとらえていることに気がつく。広津は秩序や権力の側に立たないということもあるが、他人に指図したり強制したりもしない。他者の自由を自然体で受け入れている。場合によつては『奇蹟』同人たちのような相当のわがままでも、しかもつじつまのあわないところもひつくるめて受け入れている。その分、広津自身も負けず劣らずわがままなのであるが。

とはいえ広津が堂々と戦争に反対したとか抵抗したとかというわけではない。そんな勇氣は彼にはなかつた。そういう面ではごく普通の臆病な国民の一人だった。言い換えれば、日本の20



世紀はじめという時代において、政治「個人的なこと」にみえて、実は「政治的機嫌になつてゐる。これが広津のリベラリズムの原点であり、限界である。

津和郎はやはりリベラリストなどといふ時代は、警官の横暴だの日本紳士のうには小心翼翼たる個人主義者であり、なものを政治的なものの文脈の中で考へてゐる姿がみえる。太平洋戦争がはじまる半年ほど前、一九四一（昭和16）年春に、彼は満州を旅した。そのとき広津は、協和服を着た日本人が、あつちでもこつちでも威張りちらしている光景を目撃した。たとえばホテルの玄關で、中国人の人力車夫が立派な身なりを付けて、広津和郎が示したような生活態度がひとつの統一的政治的態度であることを示そうと、……それと知らずして……苦闘してきたのである。

しかし、である。

「個人的なものは政治的なものである」というのは、20世紀後半のフェミニズムの有名な主張である。たとえば子育て中の若い母親が悶々としているのは「個人的なこと」だが、それこそまさに「政治的なこと」なのである。なにひとつ不自由ないように見える中産階級の専業主婦が、とらえどころのない虚無感にとらわれるのも「個人的なこと」であるが、そこには彼女をその立場に置いてしまう社会構造の力が働いている。だから専業主婦が空虚な感覚に悩まされているのは一見、

こういふ現場を目撃して、広津は不機嫌になつてゐる。これが広津のリベラリズムの原点であり、限界である。もちろん彼が前半生を生きた戦前といふ時代は、警官の横暴だの日本紳士の傍若無人ぶりだのを批判する主張が、とても聞き入れられるような時代ではなかつた。広津は不機嫌になつて評論の一本も書く。それだけだ。つまり個人的なことが、十分には政治的なことになりきれないのだ。日本のリベラリズムは戦後長い時間をかけて、広津和郎が示したような生活態度がひとつの統一的政治的態度であることを示そうと、……それと知らずして……苦闘してきたのである。

「個人的なこと」であるが、そこには彼女をその立場に置いてしまう社会構造の力が働いている。だから専業主婦が空虚な感覚に悩まされているのは一見、

こういふ現場を目撃して、広津は不機嫌になつてゐる。これが広津のリベラリズムの原点であり、限界である。もちろん彼が前半生を生きた戦前といふ時代は、警官の横暴だの日本紳士の傍若無人ぶりだのを批判する主張が、とても聞き入れられるような時代ではなかつた。広津は不機嫌になつて評論の一本も書く。それだけだ。つまり個人的なことが、十分には政治的なことになりきれないのだ。日本のリベラリズムは戦後長い時間をかけて、広津和郎が示したような生活態度がひとつの統一的政治的態度であることを示そうと、……それと知らずして……苦闘してきたのである。

（ひろおか もりほ）

# そんなつもりじゃなかったんです……。V O I ・ 18

去年の夏のある日、自宅アパートの前でヘンな男に遭遇した。私はアメリカから日本に一時帰国していた友人と会った帰りだった。彼女には、二、三年に一度くらいの頻度でしか会えないので、その日は私にとって

わりと特別な日だった。

駅から自宅まで

は10分

ヨイコは人をむやみに  
疑ってはいけない。のかもしれない!?

加納かがり

くらしいの

道のである。日は

まだ落ちていなかった。たぶ

ん友人と喋ったことなどを思い返しなが

ら、ぼんやり歩いてたんだらうと思う。アパート前

にたどりつくと、駐車場のところに男性がしゃがみこんでい

るのが見えた。20代後半くらいだろうか。身なりはまともで、少なくとも

も第一印象では、清潔そうな男性のように見えた。

けれどそうは言っても、私の法的な所有物ではないにせよ、心理的な準テリト

リーとも言えるそのような場所に見知らぬ男が居ることに対して、私は少々不審



かつ不快な気持ちを持った。だからほとんど視野にも入らないふりをして、そそくさと建物内に入ろうとした。そこで男は声を発した。

「あの一、すみません。足を挫いてしまったんです」。

ええ〜〜？ 足を挫いたつて？ ……そのように言われてしまうと、常日頃、善意の第三者（？）を標榜している私としては、ここで立ち止まらない訳には行かなくなつてしまった。彼はさらに続けた。「何か縛るものをもらえないでしょうか。足を固定することが出来れば、自転車に乗つて帰れますから」。

見ると確かに彼のそばには自転車があつた。仕方ないので私は聞いた。「縛るものつて、どのようなものでしょうか。タオルですか？それとも包帯？」。そうは言つたものの、私の部屋には包帯なんて無かつた。

彼はウーンと考え込んでいた。というか、今にして思えば考えるふりをしていました。私はこの一件を早いところ終わらせかけたかったので、鞆からハンカチを取り出して、「これでいかがですか？」と聞いてみた。しかし、彼はそれではダメだと言う。

「じゃあ、何がいいんでしょうか。家にあるようなもので」と、私は訊ねた。すると、「ストッキングがいいんですが」という答えが返つてきた。「足を固定するには、ストッキングがいちばん都合がいいんです」。ここで私は、ガーンとなつた。

こいつは、こいつは、こいつは……足を捻挫したなんて言っているけれど、  
どうやら、どうやらヘンシツシヤかもしれない・のようであった。しかし、しか  
し、100パーセントそうだといい切ってしまう自信もなかった。ヨイコは人をむや  
みに疑ってはいけない・のかもしれない。

私はきつと、恐怖と困惑と軽蔑が入り交じったような顔で、数秒の間、立ちつ  
くしていたんだと思う。その私を、男は甘えるような表情で見上げていた。しか  
し、いつまでもこのまま困惑している訳にもいかなかった。何かを進めて何処か  
で終了させなければならぬ。

「この嘘つき！ あなたヘンシツシヤでしょ」という言葉を投げつける勇氣も  
なかった私は、「わかりました、（それを）持ってきてみましょう」と言って、とりあ  
えず部屋に入った。部屋番号を分からせないように、わざと遠回りをした。

部屋に帰って少しの間考えた。私は足の捻挫についても、捻挫の応急処置につ  
いてもよく知らなかった。そのせいもあって、私は強い態度に出られなかったの  
だ。そう思った。そうだ、知は力なりである。知に乏しい私は、知を求めて一  
九番に電話してみた。そこで聞けば間違いないだろう。

「火事ですか、救急ですか？」という、おなじみの第一声が聞こえた。

アパート前に男性がうずくまっています。意識がないとか、そういうこと  
ではありません。男性は足を捻挫したから、ストッキングが欲しいと言っていま



す。足の捻挫にストッキングで応急処置をすることは一般的によくあることなんでしょうか？ 私はこのような内容のことを、まくしたてて訊いてみた。

救急隊員の答えは、「足の捻挫にストッキングで応急処置をすることはよくあることです。足を固定すれば自転車にも乗れますから」だった。うくん。なんだか男と同じ様なことを言っているな。どうやら、足の捻挫にストッキングで対応というのは、救急の分野においては突飛なことではないらしい。：：しかし、しかし、だからと言って、あの男がヘンシツシヤではないという証明にはならない。私は救急隊員の人に、もっと別のことを言ってみようか？ 欲しいような気がしていた。そこで、「そうなんですか!? 足の捻挫にストッキングって、へよくある」ことなんでしょう？ 〈フツの〉ことなんでしょう？ でも私、なんかヘンな人じゃないかと思ってしまうて：：」と、さらにトーンを上げてまくしたてた。救急の人は、「救急車を回しますから、場所をおっしゃってください」と言ってきた。しかし私は反射的に、〈それは困る！〉と思った。あの男が怪しければ怪しいほど、いきなり救急車を呼んでしまったら、逆恨みされるような気がしたのだ。

私は覚悟を決めて、いちばん穏健な方法をとろうと思った。とにかくお望みのものをお渡しして、お帰りいただこうと思った。私は引き出しから新品のストッキングを取り出した。セロファン包装したままのやつ。使っていないやつだからこれはまだ「私のもの」じゃない。だから、知らない人にやったってかまわないと、自分に言い聞かせた。

私が駐車場に戻ると、男性は車止めのところに腰をおろして大人しく待っていた。その姿は一見とても善良そうに見えた。しかし、問題の物品を渡すと、やはりこんな答えが返ってきてしまった。「新しいものじゃない方がいいです。使い古したもののの方が上手く縛れますから、そういうのを持ってきてください」。ガーン。

半信半疑だった私だが、このひとことで、この男は完全にヘンシツシャと確定した。まっとうな男性が、こんなことを言うわけがないよー。

私が「それじゃないです」と強くつっぱねると、男はついにあきらめた様子で、新品のストッキングを足に巻き付けて自転車に乗って帰って行った。足に不調があるとは、とても思えない立ち去りっぷりだった。

この一件があつた後、私はもつと良い対応の仕方があつたのではないかと、しばらくの間ぐじぐじと考え続けた。自分の軟弱外交ぶりが、情けなく思えてしかたなかったのだ。

何人かに感想も訊いてみた。おせじかもしれないけれど、「いい対応だと思う。つけあがらせもしないし、恨みを買うようなこともしなかった」と言ってくれる人もいた。それから、「新品をやっちゃったの？ あらう、もったいない」と言う人もいた。……うーん、なるほど。

(かのう・かがり)



木漏れ日を揺らして風の届けたり  
疾に忘れしはずの人の名

木村 郁子

一瞬そよいだ風は、思いがけない届

ぶん私の懺悔：

け物をしてきた。いたたまれない気分  
に陥りながら、私は過去から見捨てら  
れた未熟な自分を見つめている。過ぎ  
ていった時間も人も振り返ってはくれ  
ないのに、蘇った場面から目を反らせ  
られずにいる。木漏れ日の向こうに潜  
んでいるのは、実は私自身であり、た

人は時として、こんな類の事象にこ  
だわり、現実を遊離して立ち往生する  
のかもしれない。周りの何一つも止ま  
っているものはなく、自らの心境をも  
含めて、すべてが流動し続け、変わっ  
てしまっているのに：  
古い記憶にある彼とは、三十年以上

も音信が途絶えたまま…、高校時代、  
グループで行動していたのが、交際の  
始まりだった。彼の両親に気に入られ、  
家族ぐるみの交流にまで発展した。そ  
んなこともあって、何でもない時にふ  
と思いつくことになるのだろう。

細身で長身だった彼は今、どんな風  
体のおじさんになっているのだろう…  
と、面白半分の想像もしてみる。ただ、  
九十歳近いはずの母気味の消息だけは、  
知りたいと思う。

木村郁子（きむらいくこ）

岐阜県大垣市在住。一九四七年岐

阜県生まれ。一九九五年、歌集

『偽善者の糸』出版。

世は温泉ブームだ。温泉と言えば、本誌の読者は女性が多数であろうから「美人の湯」が気になるところかもしれない。この美肌・抗シミ効果を持つ温泉をはじめとして、日本には療養泉が本当に多い。温泉を好まない日本人はまれとも聞く。ここ何年、温泉を医療に利用にできないかと診察室で思案している。

あちこち温泉巡りをして、ある原則に気がついた。残念ながら（？）医学そのものとは関係ない。それは、「真の温泉好き」と「にせ温泉好き」の人の見分け方（医学的には鑑別診断と呼ぶ）だ。にせ温泉好きは、「単なる風呂好き」と言い換えてもいいだろう。読者の皆さんはどちらにあてはまるのかを考えながら読み進めて頂きたい。自他ともに認める温泉好きの特徴は以下のごとくだ。

- (1) 露天風呂には目がない。
- (2) 湯に色や匂いがないと不満に思う。
- (3) 情緒を重んじる。
- (4) 浴中鼻歌を欠かさない。いかにも、という感じではないだろうか。さらに続く。
- (5) 温泉を科学したがる。温泉好きは成分が好きである。あなたの隣に入浴し、湯をなめて「やった！硫黄の味」などつぶやいている人がいたとしたら、それはきつと温泉好きに違いない。
- (6) 秘湯を持つ。
- (7) 時に独りで温泉に出かける。温泉に独りで行く人は少ないが、温泉好きこそ単独行動をとる。そして、
- (8) 温泉巡りを決行する。あなたの周りにはいないだろうか。2、3日見かけないと思つて家を探ねてみると、「さがさないで下さい」と書置きがしてあつて、床中



に温泉マツプが散乱している人を。持ち物も特有だ。

(9) ヱクゆかたを持っていく。

(10) リトマス試験紙・飲水カップ・温度計を常に持ち歩いている。温泉のPHを調べるのにリトマス紙はお手軽だ。しかし、街角で職務尋問される可能性も高まる。

(11) 灰色の手ぬぐいを持っている。これにはわけがある。何度もヨク手ぬぐいを使っていると温泉の成分がしみ込んできて灰色になってくる。たかが手ぬぐいと思つてはいけない。手ぬぐいを頭に乗せるのは湯のぼせの防止に効果は絶大なのである。そして、極めつけは(12) 猿との混浴もはばからない。熊との混浴も辞さない。温泉においては平等・博愛の精神が全面に出る。熊に背中を流してもらい、血だらけになったとしても、むしろそれを喜びとするタイプである。

では、一方の「にせ温泉好き」はどうか。  
(1) 湯の温度は熱いのが本当と信じてやまない。

(2) 食事が豪華でないと不満に思う。

(3) きれいな施設を好む。

(4) 宿の人の愛想がむしろ気になる。

(5) 温泉というと1泊するものと決めている。

(6) 温泉に限らず基本的に旅行好きである。納得頂けるのではないだろうか。そして極めつけは

(7) 温泉の効能は後回し、である。

にせ温泉好きは自分の入る温泉の効能は気にならない。入浴しておきながら周りに「この温泉は何に効くの」と平然と聞いてしまうタイプや、入浴中に効能をちゃんと教えてもらったにも関わらず、その30分後の宴会場で「ここはどんな効能があるの」と再び聞いてしまうタイプは、正真正銘の「にせ温泉好き」である。  
こんな視点で、温泉旅行に出かけるのも、また一興ではなからうか。



# 地方政治を考える

リサイクルでは間に合いません

広岡 立美

Kさんはある有名企業に勤めている課長さんです。会社のフィランソロピーを手がけてきた人で、サラリーマンの異業種交流などにも精力的にかかわってきました。芸術や市民活動関係など今まで、はば広い人脈を持つ人です。

「わたしはなんでも美感覚でとらえるのです」と言いました。たぶんサラリーマンが脱サラして開いた個人美術館のことが話題になっていたと思います。

「へえ、たんに好き嫌いで答えているのではないですか。おいしいか、おいしくないかでしょ？」と誰かがからかうような口調で言いました。

するとKさんは、いやそうじゃないと打ち消して、まわりのものをひとつ一つ指さして、「これは美しい」「これは美しい」「これは美しい」と聞きました。Kさんは即座に「美しい」と答えました。「じゃあ、これは？」と刺身のつまの大葉を指さして聞くと、「これはどうもね」とKさん。「あまり美しくないね」

みんなが呆気にとられ



ていると、Kさんは真面目な顔で言いました。禁止にするべきだ、そう

「大葉はたいてい農薬が大量にかかっているのです。農薬を散布しているところを想像してみてください。そうすると、おいしいとか美味しくないとかより、美しくないという感覚になるのです」

おなじようにペットボトルはリユースできない。リサイクルするにしても大変なエネルギーを必要とする。ペットボトルの場合は、あれこれリサイクルの方法を考えるよりも、そもそもつくらないことが大切だ。製造

Kさんは言いました。昨年容器リサイクル法

が施行されゴミの分別回収に力を入れるようになりました。そのこと自体、良いのですが、きちんと分別するからといって、れだけでもゴミを増やしてもいいということではないのです。小さなペットボトルが便利がられるようになり、種類も増えています。ペットボトル全体の生産量もどんどん多くなっている現実を見るにつけ、そこをはきちがえているように思えてなりません。

ペットボトルはたしかに便利かもしれませんが、軽いし、割れないし、ふたをすれば、中身はこぼれません。だから最近はこちらでも、ペットボトルを持ち歩いている人の姿をよくみかけます。

す。電車が揺れたら、ボトルの中身がこぼれて隣の人の服を汚さないとも限りません。迷惑です。

路線にもよりますが、高校生たちがべたつと床に座り込んで傍若無人な態度で飲食していることもあるようです。そういう姿をみて気分が悪くなるのは、考えてみると、ただマナーだけの問題ではないように思います。大量のペットボトルがまちに氾濫している。そのペットボトルは、たぶん電車を降りたときに捨てられます。ゴミになりません。それから先、

車の中でペットボトルで清涼飲料水を飲んでいる人さえいます。そういう姿を見ていると、わたしはやはりとても嫌な気持ちになります。乗客が頻繁に降り降りする電車の中で飲食するのはマナーに反しま

ペットボトルはどこへ行くのか。それを想像すると、わたしたちがもの凄い勢いでこの地球を汚している様子が目の前に浮かぶようです。

ペットボトルのような物質の場合は、どんなに小手先の対策をたてるよりも、やはり根本を絶つ

ほかないでしょう。フロンガスは地球規模で製造禁止になりましたが、残念ながらオゾンホールは小さくなる気配がありません。そこから有害な紫外線が、きょうも地上に降り注いでいます。

いま日本では毎日大量のゴミが発生しています。環境に深刻な影響を与えている有害物質もあります。ゴミを焼却するときにも、焼却のしかたによつては、ダイオキシンという猛毒物質が発生するのですから、問題は一筋縄ではいきません。

環境問題はこういう問題ですから、地方自治体のできることに限りがあります。どんなに地方自治体が頑張っても、法律で根本的に対処しないとどうにもならなりません。国は事業者が出すゴミ回収のしくみを変えた

りしていますが、やはり小手先の対策でしかないというしかありません。

どうして根本的な対策ができないかというところ、大所高所にたつて国家百年の計を考えていないからです。業界という個別

利益の利害はよく反映することができ、長期的な視野から国や地球全体の問題を深く考えて政策を打ち出すことができないからです。これは戦後の自民党政治の最大の欠点の一つです。

こと環境問題にかかわるかぎり、業界の利害の調整といった手法では問

題はなんにも解決しません。たとえばペットボトルでいえば、それ自体大量のエネルギーを消費するリサイクルを考えるのではなく、ドイツのようにそもそも製造をやめてしまうのが適切です。

21世紀の政治は、大所高所から地球規模でものを考える、そういう政治でなければならぬと思います。「地球規模で考え、地域で行動する」という言葉がありますが、地球規模で考えることが地域で考えることが反対方向を向いていたら、社会は良くなりません。



# 赤ちゃんの尊厳死

## 18 トリソミーの会

櫻井 浩子

出産時に、赤ちゃんに何らかの障害があった場合、障害の程度・病名によってクラス分けがなされていることを、世間では知られていないのが実態である。

そのことは医療関係者の間では、まかり通っていることかも知れない。実は、クラスA（あらゆる治療を行う。対象はほとんどの患児）、クラスB（一定限度以上の治療は行わない）、

クラスC（現在行っている以上の治療は行わず、一般的養護に徹する）、クラスD（すべての治療を中止する）、クラスE（死期を早める操作を行う）とクラス分けされているのである。なぜ私がこのことを確信して言えるかと言えば、私の娘は

トリソミー（1/4000人の出生確率）という染色体異常の病気を持って生まれ、75日間という短い人生で逝ってしまった。この病気はクラスCに位置付けられる。普通のお産なら、周囲から「おめでとう」の祝福の言葉を掛けられる。しかし、18トリソミーの場合、ほとんどのお母さんは「おめでとう」の前に、「子どもの死」を宣告されるのである。

私は緊急帝王切開をし、すぐ娘は子ども医療専門病院に搬送された。出産後2週間目の初対面の時に、医師から「娘さんの身体は生きていられる身体ではないです。2ヶ月もつたらいいでしょう。手術もできませんが、どうしますか？この病気で、家に連れて帰れたお子さんはいません。」と言われた。ほとんどの親が「18トリソミーだから、しょうがない」「18トリソミーだから、積極的治療は避けましょう」と言われているのである。今では医療の進歩により出生前診断の結果から、「染色体異常なので、中絶をしましょう」と言われ、帝王切開もされずに中絶・死産を余儀なくされているケースもある。この前提にあるのがクラス分けであると思う。

当時の私は、病名すら理解できず情報もなく、

常に「危篤」の文字が頭の中をよぎり、日々緊張の中で途方に暮れた。手探りの中で、娘の命を医療関係者に預けるしかなかった。18トリソミーに関する情報が手に入らずマスメディアや専門書もなかったので、自ら会を立ち上げなければ、この病気に関しては白紙のままだと思っただ。今春、「18トリソミーの会」を立ち上げ、私が知らない現実も、目の当たりとした。娘の死から4年経った頃私はこのクラス分けを知り、それは「命のランク付け」だと感じた。それを知った時、とても悲しく憤りさえも感じた。「だからなんだ・・・」看取り時の冷たい医師の態度に、隠された本心が見えたように思えた。私自身、自分の子どもが障害を持って生まれたという現実を受け止めるには、正直なところ多少の時間がかかった。しかし、娘の全てを受け



止めた時から、娘はかけがえのない普通のいとおしい存在であつたし、今でもその気持ちに変わりはない。

世の中の全ての疾病において、その病名が存在する限り、「何分の1」という数字が存在する「1」という命の重み、そしてその「1」に関わる家族の熱い想いを無視してはならない。特に、親が情報持たず急変する疾病においては、十分なインフォームド・コンセントが行われず、医療側の言いなりになる場合が多い。現実には18トリソミーでも退院し、一日一日を精一杯生きて成長いるお子さんもいるのである。医療は病名や症状のみで、チャート式のように振り落とすような押し付けの医療でなく、家族との話し合いの場を十分取りながら同じテーブルで親の意思を尊重し、赤ちゃん一人一人にあつ

た医療をして欲しいと思う。「尊厳死」という言葉は、大人だけのものではない。乳幼児でも、更に胎児にでも当てはまることなのである。

医療現場では、一時の通り過ぎた一人の子どもに過ぎないかもしれないが、親にしてみれば、特に看取りの儀式は一生忘れられないものである。18トリソミーでも、「人工呼吸器をつけてまで、苦しい思いを子どもにさせたくないという選択をする」ご両親もいる。全てにおいて、積極的治療をして欲しいというのではなく、第一に親の意思を尊重し情報を十分提供した上で、個々にあつた治療方針をしていただきたい。たとえ短い命でも、一人の人間として尊厳された人生を送る権利もあるし、その権利を尊重してくれるメンタルと具体的な制度のサポートが必要ではないか。

(さくらいひろこ)



私たちが書きました

三年前の第1集につづいて、昨年11月25日に第2集が出ました。女性センターで学んだ女性たちの自分史です。第2集は「人生に多大の影響を与えた男性」がおもなテーマになっています。

というわけで登場するのは、夫、恩師、父、息子など。お酒やパチンコが好きなお父さん、勤務先の工場がつくった学校の先生との出会い、闘病の末に逝った弟……。涙なしでは読めなかったり、ついにつこりとしてしまったり、あたたかい気持ちになれます。

独身時代に夫からもらったラブレターの中身が公開されました。ついつい自分が書いたラブレターを思い出しました。たしかに相当に無理なことを書きます。書いているときは本気です。でも、もらって読む方はきつと半信半疑なんだろうなということが、この歳になってやっとわかるような気がしました。

等身大の女性史を語り伝える貴重な史料です。

女性センターだけでなく公立図書館や高校中学校にこそ、ぜひこういう図書をそろえてほしいものだと思います。地域の生きた歴史を学ぶ大切な教材です。小学校の総合学習の時間などにも生きた教材として活用できるのではないのでしょうか。



## 派遣で働く

### 若い女性の心のうち

広岡 守穂

フリーター、派遣・・・

わたしたちの目には不安定で、割が合わないように見える働き方だけど、若い人たちはそんな働き方がそこに快適らしい。もちろん彼らにも悩み迷いはある。将来の見通しがきかないことは、やはり彼らにとつても不安なのだ。けれども会社ののちの生き方は息苦し

い。できればパスしたい。

働きながら学校に通ったり、派遣契約が終了したら外国をしばらく旅してみたり。そんな二足のわらじの生き方のほうが、自分らしさを保持していける。そのほうがやっぱり居心地がいい。女子の場合は、さらにそのうえに「結婚」の2文字が重なってくる。そんなこ

んなで、派遣で働く女性も30歳近くになると・・・。  
以下、教え子からの聞き取りを対話ふうにとまとめてみた。

パラサイトシングルといわれるけれど、本当はひとり暮らしをしたい

いた。なんというか、うす汚れた大人とは違うと思いつつ、そのくせ力がない自分に嫌悪感があつた」

パラサイト・シングルっていうんですか、幾つになっても親元で暮らしていて独身貴族を楽しんでいるっていう・・・でも、できればひとり暮らししたい女の子は少なくないんですよ、本当に。したいけど、できないんです。

最近の若い女性は「複雑系」っていうか、これではなかなか一筋縄ではいきませんよ。

なかには昔の「三高志向」みたいな子もいるし。マジ

に結婚願望強く、でも愛情関係一切期待せずで、合コンで出会った男の人にいきなり年収を聞くみたいな。人生の最大の価値観はハイソな生活したいの一点張りなんです。わたしの知り合

い知り合いにいますよ、そんな子。しょっちゅう合

コンに出かけていって、条

件のいい男がいないかさが

しくっています。えっ、

その子、容姿に自信がある

んだらうですって？ たぶ

んそうでしょうね。ええ、

一度も会ったことはありません、その子とは。メール

せん、その子とは。メール

友だちのうわさに出てくる

んですよ、しょっちゅう。

やっぱ滅多にいない子だけ

ら、顔も知らないけれど、(メル友の)だれよりいちばんよく知ってるみたいな状態ですよ、いまや。ええ、

愛よりお金よって公言する

ようなタイプの子は稀少で

す。

### 派遣の働き方を選ぶ理由

「わたしは学生結婚してすぐ

子どもが生まれた。生活は

家庭教師の収入に頼ってい

た。けっこう実入りはあつ

た。生活は苦しかったし、

客観的にみれば将来の不安

はいっぱいだったが、塾を

開くとかすれば案外それで

ずっと生活していけるんじ

やないかと思っていた。そ

れにしても最近の若い人のフリーター感覚はわからな

い。トータルすれば、会社

勤めにくらべて断然損だと

思うが、そんな損得勘定に

はまるでこだわっていない

ようにみえる。せつかく就

職したのにすぐ辞めてしま

ったり、平気だ。生き方と

してちよつと愚かじゃない

かと思う。どうも理解でき

ない。派遣で働くというの

も理解できない。何年かす

れば正規雇用との給料の差

が開くばかりだろうに、ど

うして割りの悪い派遣を選

ぶのだろうか」

さんいます。で、どうしても

したいけどできないかとい

うと、お金なんです。つま

りひとり暮らしするには収

入が足りない、ということ。

いま一流大学卒業しても

派遣で働く女子がけっこう

多いでしょう。その気持ち

わかりませんか？ ええ、

そうでしょうね。年上の世

代の人にはわかりませんよ

ね。だいたいわたしたち就

職については、いつも親と

ぶつかっていますからね。

親はみんな申し合わせたよ

うに、娘が名の通った企業

に就職することを望みます。

親は安定第一ですからね。ま、わたしたちも有名企業



いわけではないんです。

でも心のうちは複雑なんですよ。年上の人にはびつくりされるけど、公務員とか民間企業の正社員とかで働くことが自然なことかどうか、っていう感覚があるんです。そういう生き方は保守本流ではあるけれど、会社だけがすべてではないし。そうでしょ。かといって派遣は安定しないし、こころ千々に乱れてって感じですね。

ない。しかし、だ。派遣はことでしょうけど。時給1トロールする子もいたりしない。しよせん派遣。会社の重要な意思決定にはかわれなトとして重用されることはあるのだろうか。腕一本で店を渡り歩く板前さんなら、たしかにかっこいい。でも量には必要とされなう。他人が持たない凄じいものでは？ だったら体の良い使い捨てと変わらない。わたしたったら、そんなのは嫌だな」

自由はもつと高いこともあるけど。でも（派遣は）自由が利くでしょ。会社に縛られずに気楽に働けるし。みんな最初は一応総合職に、と思うんです。でも、いつまでも青年でいたすね、結局は総合職で働きたい、就職して自分を何者か続けるのは無理かなと。あと、自己限定したくない、要するにいつまでも社会に出る前のモラトリアム状態に7〜8年で辞めちゃいます。留まっていたいというわけ。

会社に縛られず

自由に生きたい

まずそもそも正社（員）になるより派遣で働くほうが年収は高いんです。ええ、もちろん最初の何年間かのうするとピルを飲んでコンでも大学院生の中にこうい

「安定した仕事ばかりがいとは、わたしだって言わ

「安定した仕事ばかりがいとは、わたしだって言わ

「安定した仕事ばかりがいとは、わたしだって言わ

うタイプは少なくない。

の周辺の労働。契約の終

で、結婚しようかなと。

実はわたしが学者をめざしたのも、深層心理には社会に出たくない、会社にこきつかわれたくない、という意識が働いていたかもしれない。でもいつまでもモラトリウムではいられない。

最初から派遣で働いていふと思うのはそんなときで、25〜28歳くらいですかね。だいたいこの時期に、会社を変わるケースが多いです。すると次に派遣の契約をするとき、30歳近くになっていて、30歳を越えたと派遣で働き口はぐつと少なくなつてくる。そうしたら仕事つづく人もいますけどね、就職した子もですね、働

いつかは未限定の自分に決着をつけて働きはじめなければならぬのだ。

就職した子もですね、働

わたしは秘かに派遣というのは、モラトリウムの制

つき合っている彼は、結婚をほのめかされて、どう

アルバイトの延長だ。そうやっていけば、人に仕えな

感じるかというのと、「どうしよう。いまの給料じゃとても養えないよ」って思っ

でもそれは現実直視じゃない。現実を言えば、低賃金

女が結婚を考えると、内心「わたしも働くから



「いじゃん」と思ってるんですけど、それって男の沽券にかかわるっていうか、甲斐性なしになりたくないというか、男の子は構えちゃうんですね。そういう彼氏のことを女の子は「なんでそんなに気負ってるの？」ってみるんですけどね。

「もちろん男が女を養わなければならぬなんて、古いこと。わたしだってそんなことを考へてはいない。妻が夫を養ったっていいんだし。ただ女も男もそこそこ食べるだけ稼げばいいとい

### すれ違う男の結婚と

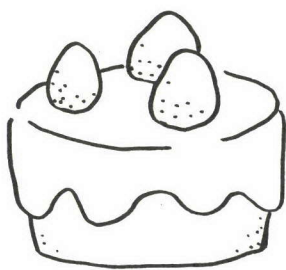
#### 女の結婚

帯収入は天と地ほど違う。て・・・。

「もちろん男が女を養わなければならぬなんて、古いこと。わたしだってそんなことを考へてはいない。妻が夫を養ったっていいんだし。ただ女も男もそこそこ食べるだけ稼げばいいとい

食えるだけ稼げばいいとい

だから、(男は)そこそこ稼いでいけばいいじゃん、と男は思っています。しかし男は家族を養わなければ、女の学校に入りたいたいで、ひとり暮らししたいです。だから、(男は)そこそこ稼いでいけばいいじゃん、と男は思っています。しかし男は家族を養わなければ、女の学校に入りたいたいで、ひとり暮らししたいです。だから、(男は)そこそこ稼いでいけばいいじゃん、と男は思っています。しかし男は家族を養わなければ、女の学校に入りたいたいで、ひとり暮らししたいです。



# 女性のライフスタイルを 考える

小山賢美

## 祖母の場合

先日、大好きだった祖母が亡くなったのであるが、私の知る限り当時の人たちがみんなそうであったように祖母もそれなりの苦勞をしたようだ。学校を卒業し、すぐさま奉公に出て、25歳でお見合い結婚。子どもが4人。当時にしてみると、結婚は遅かったのだろうか。

そのころ戦争があり、4人の子どものうち、戦後と戦前の子で歳が随分離れている。(サザエさん一家のようなものです)。子育てをしながら、夫のいない家を守るには大変だっただろうと思う。いまの人たちが子育てが大変だと言っているのは比べものにならないのではないだろうか。

しつけにはあまり厳しく

はなかった人だが、祖父が仕事に出かけるときには必ず子どもたちを全員起こしてお見送りをさせたそうである。そこらへんは今の家庭にはないような父親の威厳を保つしつけだと思う。

もちろん専業主婦だったが、祖父は自営業(大工)だったので祖母もその手伝いをしていたようだ。マネージャーみたいなものだろうか。子育てが終ってから自由な時間を趣味に使っていたようだ。もちろん私たちの面倒も見てくれていた。母親がパートで働くようになってからは、母親がいない時間に面倒を見てくれていたので、祖母の存在は私の人格形成にかなり影響していると思う。

## 母の場合

次女に生まれ、25歳でお見合い結婚。子どもが3人。私が末っ子である。高校卒業後、銀行に就職した。出産のため退社。当時の典型的な女性のライフパターンである。当時してみるとやはり結婚したらやめるのが普通だったのだろうか。しかし、今母親に聞いてみると、出来たら仕事を続けたかったそう。そう思っている団塊の世代の女性って多いのではないだろうか。今のような、育児休暇なんてなくて、どう考えても仕事をしながら子育ての出来る環境じゃなかったんだろ



う。そもそも、女が社会で働くようになってからそんなに時間も経っていないし、子育ては仕事しながらなんて思ってもいかなかった世代だろう。

私が幼稚園に行くようになってからパートタイマーで働きだして、現在も続けている。M字型の中にしっかりと入っている人である。M字型というのは、学校を卒業してから結婚または出産するまではフルタイムで働き、子どもが小さいうちは家事育児に専念し、子どもが大きくなってから再び働き出す（多くの場合パートタイムで）という生き方の女性のことである。

## 若い人の場合

## (27歳のある女性たち)

いろいろいるけれど、結婚を期に仕事を辞めてしまいう人もままいる。遠距離恋愛の末、結婚した人は、夫が地方公務員のため、仕事をやめて雪深い地方へ。地方は仕事が少ない。再就職は難しい現状だそう。都会に住む人でも手に職がある人のほうが仕事を続けやすい。子どもがいて在宅で働く人もいる。

バイト先とか大学の先輩とかいろんな人がいるけれど、いまのいわゆる普通は25歳くらいで結婚して、仕事を続ける人と辞める人が半々。なにをして普通というのかわからないけれど、

確かに25歳で結婚して、子どもを産んで：って人が多し、大学のゼミでやったワークシヨップでもそんな意見が多かった。しかし、上の二世代に比べたら、ライフスタイルは多様化している。もちろん、祖母の時代だって、結婚しない女性もいただろうし、母の時代

だって仕事を続けている人もいるだろうが、明かにいろんな道を比較的簡単に選んでくる時代にだんだんなってきたような気がする。

でも、依然仕事は男性が中心で、結婚して子どもができた女性は自分の人生を犠牲にせざるをえない場合も多い。仕事をしていても、

転勤などで続けることが難しかったり、やめて夫について行って地方に出たりした日には仕事もなくなつて：。なんてことも多いのではないだろうか。

## 男性の気持ちと社会のしくみ

大学のゼミの男の人たちは、家事分担とか男女平等意識とか高いと思う。でも、他はどうかといったら、やっぱりまだまだ意識は低いかもしれない。結婚したら家において欲しいっていう男の人結構いる。女の人の方も家に入りたいたって人もいるので、パートナーと意見が合えばとても幸せだが、そうじゃなかった場

合や気が変わった場合は大変なことになるだろう。

また、男性の家事分担の意識と女性のそれとは多分に違っている。「アエラ」で出している『子育ては損か?』を読んでいる思ったのだが、男

企業の中のトップにいる人たちだって昔は子育て世代だったはずで、そのとき家庭を顧みれず苦勞したはずなのに、な

女性意識ばかり先に変わらなければならないのだと思う。

実は女性のほうが多く働いているというデータをみたことがありました。それは、賃金を払われないアンペイドワークを加えるということ

の人は家事や子育てを手伝っていると言うが、手伝っているというのでは主体はやはり奥さんにあるわけで、分担しているとは言えない。しかし、

そう考えてくると、男性のライフスタイルはあまり変わっていない。昔から外で仕事するのが当たり前になっ

て子育てしている世代を応援していると言っています。男

一方で分担したいけどできないという意見もある。仕事に24時間拘束されていて家庭のことがしたくてもできないという。それもそうだ。企業は

料がいいのも現実で、出産で休むこともないから社会で働くには都合が良い。そのため

男性が働いたほうが給料もつとゼミの男子学生のよ

女性がかかわらずたくさん働いて子育てしている世代を応援していると言っています。男

たくさん働く人が昇進するよ

少ないように思える。女性のライフスタイルの選択の幅は

女性のような気がする。そして、男性が家庭に

かしていつてほしいと思いま

うにできている。家の仕事を

社会進出に伴って男性はあまり

性か家庭に

き方のできる会社も増え

(こやま さとみ)



## 全国に広がるファミリーサポートセンター

北九州市のほっと子育てふれあいセンターを訪問して

石田 敦子

### 北九州市の少子化対策

昨年11月の初頭、私は北九州市の「ほっと子育てふれあいセンター」を訪れた。

北九州市は政令指定都市の中で最も高齢化率の高い都市であり、それと背中合わせに少子化も急速に進んでいる。北九州市は鉄鋼業で栄えた都市であるが、最近はその需要が海外に奪われ停滞気味である。若者たちも北九州市から離れているため、少子高齢化が進んでいるのである。

そこで行政も少子高齢社会対策を進めており、平成13年度から「北九州市

少子社会対策推進計画（新子どもプラン）を実施している。この中で、少子化の背景として仕事と子育ての両立の難しさや、子育てそのものへの不安など、さまざまな社会的要因を挙げ、家庭や地域での子育て機能の低下を指摘している。

そしてその施策として、地域づくりⅡあんしんシステム（相談・支援の仕組みづくり）、地域活動への支援（子育て支援Ⅱすくすくシステム（子育てしやすい雇用環境の整備、子育て支援サービスの充実）、子どもへの支援Ⅱのびのびシステム（子どもが直面する課題への対応、豊かな人間性を育む学校教育の充実、遊び・体験の環境づくり）を推進している。

ほっと子育てふれあいセンターはファミリーサポートセンター

私の訪問した「ほっと子育てふれあいセンター」は、すくすくシステムに組み込まれているもので、働くお父さんお母さんのために、子育てと仕事の両立を支援する目的で始められた。

「子育ての手助けをして欲しい人」と「子育ての手伝いをしたい人」との相互援助活動を行う有償ボランティアの会員組織である。厚生労働省がファミ

りサポートセンターは、働くお父さんお母さんのために、子育てと仕事の両立を支援する目的で始められた。「子育ての手助けをして欲しい人」と「子育ての手伝いをしたい人」との相互援助活動を行う有償ボランティアの会員組織である。厚生労働省がファミ

リーサポートセンターとして推進している事業である。

具体的には、急な残業で保育所・幼稚園へのお迎えが間に合わないとき、仕事の都合で保育所の送迎ができないとき、熱は下がったけれどまだ保育所に預けられないとき、上の子を病院に連れていきたいので下の子を預かって欲しいとき、お産で入院するため上の子を預かって欲しいときなどに支援活動を行うものである。

この仕組みは平成10年10月に小倉北区で試験的はじめられ、平成11年4月からは小倉南区・戸畑区・八幡東区を加えた4区で展開、平成12年4月から市全域に拡大した。平成12年度の会員数は463人、うち依頼会員229人、提供会員178人、両方会員56人。平成12年4月から平成13年3月までの活動件数は2404件でその8割弱が保育所・幼稚園の送迎や帰宅後の援助となっている。

子育ての手助けをして欲しい人は

「依頼会員」として登録される。一方、子育ての手伝いをしたい人は「提供会員」として登録される。そして依頼・提供の両方の活動をしたい人は「両方会員」として登録されることとなる。センター内ではアドバイザー3名が活動の調整を行い、各地区にサブリーダーを2名ずつ（門司区は1名）配置し、グループ会員の取りまとめ等を行っている。

### 子育ての援助のしくみ

援助のシステムは、まず、センターへ援助依頼の申し込みをする。（事前に依頼会員として登録してあれば、突発的な出来事が生じた場合、すぐにセンターを利用することができる。その際、会費として月額1000円が必要）。その後、アドバイザーが提供会員に声をかけ、事前調整を行う。都合のつく提供会員が見つかったら、事前の打ち合わせをする。援助は原則として提供

者の自宅で行われる。有償ボランティアであるから、活動終了後に報酬の授受が行われる。それで援助活動が完結するという仕組みになっている。

利用時間は月曜から土曜日までの朝7時から夜7時まで（一時間800円）、それ以外の時間や日曜祝日も利用できるが料金が割り増しとなる（一時間1000円）。また、病児保育の場合も割り増しとなる（一時間1000円）。料金は、ほっと子育てふれあいセンターに払うのではなく、依頼会員が提供会員に直接払うシステムになっている。

北九州市のファミリーサポートセンターは、全国のファミリーサポートセンターとは異なり、それを「ファミリーサポートセンター」とは呼ばずに、「ほっと子育てふれあいセンター」と呼んでいる。その理由は、右から左に子どもを送るのではなく、あくまでも「子どもが真ん中」ということを強調するために「ほっと子育て」という名



称にこだわっているからだという。また「地域」にこだわり、依頼会員に対して、アドバイザーは必ず依頼会員の近隣に住む提供会員を紹介するなど、世代を超えた「地域」での支えあいを大切にしている。

育児に追い詰められている母親のために

ほつと子育てふれあいセンターは併設されている北九州市立育児相談センター（センター室長・南里ソエ子さん）と両輪の関係にある。たとえば育児相談室に来る子育て中のお母さんの中には、心理的に追い詰められている人がいる。そんなお母さんにはちよつとでも休む時間が必要だから、ほつと子育てふれあいセンターの事業を紹介し、利用してもらうなどの対策を取っている（少しでも育児の負担を軽減し、特に虐待などの発生を未然に防ぐためにも援助活動を行っている）。

育児相談センターは、育児に関する幅広い情報を集め、育児に悩む母親の育児相談に応じるとともに、適切な育児情報やノウハウを提供するための施設である。ここでは電話相談と面接相談が行われており、電話相談は保育所長など保育の専門家が相談に応じ、面接相談はセンター室長が直接相談に応じている。また絵本の貸出や、年に10回程度の育児講座を開き、子育てに関する情報を提供している。

よその子を預かるといへんさ

わたしはアドバイザーの方に案内していただいて、援助活動の実際をみせていただいた。

とあるマンションの3階に提供会員の自宅はあった。間取りは2DKである。提供会員が預かっているのは小学生の兄と保育園に通っている弟の兄弟である。提供会員の家につくと、兄弟はすぐにテレビをつけアニメを見始め

た。提供会員にも小さな男の子がいるが、彼はわたしの姿に驚いてしまったのであろうか、お母さんにくっついて離れようとしなかった。

いつもは子どもたち3人で仲良くアニメを見てご飯を待っているとのこと。「テレビをみせておくと静かです」と提供会員は語った。その日の夕飯はいただきもののちらし寿司だった。彼女は手際よくちらし寿司を電子レンジで温め、卵スープを作った。

邪魔にならないよう奥の部屋で兄弟の様子を見ていた。兄弟はそこが我が家であるかのようにのびのびとしていた。正直に言うと、子育て経験のないわたしには、やりたい放題のようにもみえた。でもたしかによその子にはうるさく言えないなあ、と思い直した。子育てのたいへんさをかいま見たような気がした。自宅で他の家の子どもたちを預かることは相当にたいへんだ。覚悟がないと提供会員にはなれないのではないかと思った。

## 子育てにおおいかぶさる社会の矛盾

案内してくださったアドバイザーさんは「本当に支援の必要な人に、なかなか支援が行き届かない」と嘆いた。

ほっと子育てふれあいセンターのおもな目的は仕事と子育ての両立支援である。だからセンターの典型的な援助

活動といえば「共働きの家庭で保育所のお迎えが間に合わないときに、近所の子育てを終えたおじいちゃん・おばあちゃんに迎えに行ってもらい、少しの間預かってもらう」といったかたちである。利用会員にはたいへん好評で、それだけにいま仕事と子育てを両立するのがどんなに大変になっているかがうかがわれる。実際ファミリーサポートセンターは毎年倍々になる勢いで増えている。

しかしセンターを利用してはいる会員の実態をみると、地域における有償ボランティア活動と、きれいごとばかり言っではいられない現実を見せつけら

れることがある。たとえば提供会員はボランティアで地域の子どもを預かりたいという人ばかりではない。家にながら稼ぎたいという人がかなり多い。なかには働かなければならないが事情があつて家を空けられないので、仕方なく提供会員になることで収入をえているという人もいる。

高収入の共働き夫婦の子どもを、そんな事情の人が預かっているのを見ると、なんだかボランティアという言葉にふさわしくない光景のように感じる人がいるかもしれない。さすがにそれは古い考え方だとは思ふが、提供会員も依頼会員も圧倒的に女性というのは、男女共同参画の理念に合わないと思う。

### 地域の子育てをゆたかにするために

社会の矛盾のしわ寄せを子育てが受けている、と思わせられる事例も少なくない。そんなときは憤りを感じる。

社会の仕組みそのものが変わらなければならぬのに、その矛盾のしわ寄せを善意の有償ボランティアがカバーするのは、やはりおかしいのではないか。子育てがうまくいかなくて心理的に追い込まれてしまっているのに、夫は仕事を口実に関心を示そうとせず、ファミリーサポートセンターに助けを求めてきたお母さんがいた。提供会員が一日に2時間子どもを預かるようになったら、お母さんは見違えるように元気になったという。こういうケースなど、父親がふつうに子どもを可愛がるだけで本当ならなにも問題がなかったのではないか。そう思うと、やはり男性はもつと家庭や子育てにかかわるべきだと痛感する。

なにはともあれ「地域での子育て」を発展させることは21世紀の行政の重要な課題である。もちろん北九州市にとつても、地域全体で子どもたちを育てていこうという試みは、これからますます重要になっていくことだろう。





レーニングで解決できそうな部分であれば、トレーニングを受けることで、それらの壁を克服できるかもしれない。そんなイベントがあつたらおもしろい。そんな思いから生まれた。

学んできた。IFNでは今後もちょうな企画を通して、NPOの存在を学生に知らせ、学生にとって身近なものにすることで、社会へはいろいろな関わり方があることを伝えていこうとしている。

た。

それなのに、交流会後、スタッフ同士で行った反省会での空気はどんよりとしていた。成功に見えたイベントも、裏側から見れば、「もつとこうすればよかった。」の連続だった。事前の準備ができていたように思っていたのが、当日になつてみると、かなりみんな慌てていた。「あれもやらなきゃ、でもこれはどうなるの？」自分の仕事、他の人の仕事が分からなくなつてしまい、うろたえてしまつた。終了後、スタッフは疲れきつていた。それだけそれぞれが体をつかい、気をつかっていた。

IFNとは、中央大学の学生を中心とする学生NPO団体である。IFNはIntermediary For NPO(NPOの中間支援)のことを指し、「学生とNPOをつなぐ」をコンセプトに、学生が社会を知り、今後関わっていくためのサポートをしている。自分たちが知らないことをみんなで知るきっかけをつくろうという考えから、これまで「学生のためのNGO基礎講座」や、学内での「NPOの勉強会」などを行い、スタッフも参加者と共にNPOについて

「NPO基礎講座」や「勉強会」とあるように、これまでIFNで行う企画の対象は、「NPOってなに？」という人であったが、今回は「すでにNPO等の活動をやっていくけどうまく行かないこともある。」という人を対象に行つた。これまでとは対象が違つていたが、その分スタッフもこれまで得た知識を土台にして、それぞれが参加者と同様にスキルアップさせたり、新たなネットワークを広げたりすることができた。パワーアップセミナーは大成功に終わっ

た。セミナーは具体的にはどのようなだったのか。Part1はパネルディスカッション。10時30分開始のはずだったが、人数の集



まりが悪く10分開始を遅らせることとなった。終了後の参加者の声にもあったが、「入ったときに人が少ないのでびっくりした。」そんな状況での始まりだった。

でも、講師の方も来ているし、そろそろはじめないと。10時40分、パワーアップセミナーが始まった。

パネリストは4人。それにコーディネーターが2人。NPO等で活躍するオトナ4人にNPO等の活動をしている若い2人が参加者の思いを代弁してパネリストにぶつけた。

パネルディスカッションは和やかな雰囲気の中で始まった。パネリストは、市民外交センター代表の上村英明さん、地球環境パートナーシッププラザのNPOスタッフである川村研治さん、コミュニ

ティサポート研究所代表、斎藤明子さん、まちづくり情報センターかながわ（アリスセンター）スタッフの土屋真美子さん。前半で各パネリストの自己紹介や団体説明などを伺った後、後半では日常生

活や団体運営、NPOで実現させたい夢などを語って頂いた。パネルディスカッションは終始いい雰囲気のまま進められた。というのも、このみなさんがもともとつながりのあった方同士だったため、呼吸が合っていて、とても楽しそうにお話をしてくださったからだと思う。

それぞれが自分個人のこれまで活動遍歴やその時々思いなどを、気持ちそのままに語ってくださった。団体の紹介や運動の説明を聞く機会は多くあっても、個人の思いまで聞ける機会というのは

あまりないし、インタビューでもなかなか聞き出せない部分であると思う。パネリストの人間性が伝わってくる、素敵なパネルディスカッションになった。

Part1終了後は軽食を囲んでパネリストと参加者が交流できる場を作った。気づいたら、Part1の間に人が増えていた。部屋は参加者でいっぱいになった。

パネリストにさらに話を聞く人あり、参加者とネットワークを広げる人あり。私も中に混じってパネリストの方にいろいろとお話を伺ったりした。パネリストの方と直に話ができたり、いろいろな団体の人と話をできる場があることは貴重だと思った。

午後はトレーニング&ワークショップ。「団体運営お悩み別解決法」として「リクルートと新人研修のコツ」を学ぶ場をASED JAPAN代表の小川絢子さん、「パソコンの有効活用」のスキルを身につける場としてシステムエンジニアの杵島正和さん、「会議・ミーティングの開き方と進め方」を学ぶトレーニングをPOWER市民の力事務局長の岡田泰幸さん、「広報プランの立て方とメディアの活用法」を得るために松山拓郎さん（PMCIJ 広報サポーター）、吉田理映子さん（広告プロデューサー）の方々に来て頂き、参加者も希望パートに分かれてワークショップ形式で知識を吸収していった。

IFNスタッフもそれぞれ担当

のところで司会をしたりしながら参加した。私は前から興味のある「会議・ミーティングの開き方と進め方」に合流した。12人ほどで講師の方を囲むようにして座り、前半は講義を聞き、後半は講義で聞いたことを使った模擬ミーティングを行った。自己紹介から始まり、ミーティングでの悩みや直したいと欲しているところを挙げ、それに基づいて講師の方が解決法を与えてくれた。

ここでは、普段なんとなくやっていたミーティングにすぐにも活用できそうなアイデアを知識として得ることができた。私の中では、うまいミーティングなどは参加する人の能力の問題であり、学べるものではないと思っていた部分があった。しかし、言葉で表現された、方法論としてまとめられると、普段のミーティングの悪い部分が見えてきて、その解決法も浮かんできた。セミナー終了後に行った、IFNのセミナーの反省会のミーティングで学んだことを還元してみると、いつもよりスムーズに議題が進み、時間内に終わることもできた。能力の問題などではなく、知識として学ぶこともできるんだと実感できた。

その他のトレーニングも盛りあがった。それは参加者がそれほど多くなかったことがよかったようだ。参加人数が少なかったことで、参加してくれた方は意見や質問をより多く講師の方にぶつけることができたのだと思う。もともとPart2はワークショップ形式でやることになってい



たため、募集人数も、各パートにて、個々の「人」が力をつけ、各参加できるのは25人までとしている人が所属している団体が勢いを増した。実際やってみると、25人でも、さらにはNPOなどの団体全多いと感じていたかもしれない。体がパワーアップすることを願う12〜13人という人数でやれたこと、行ったパワーアップセミナー。によって、参加者同士、もしくはその交流会をもつて全日程を終え参加者と講師で、近づいていくことができたのだと思う。

終了後、IFNのメールアドレス

Part3の交流会。場所は飯スにお礼のメールが何通も届いた。田橋の居酒屋である。お酒を交えうれしい半面、アンケートを見ながら、自分たちの反省点も拾い出す。席を共にして、自己紹介をしたり、

自分の活動を語ったりしながら、喜んでばかりはいられない。今そこで新たなネットワークができたこと、またはイベントを実行したこと、

人と人がつながることにより、回参加者と共にトレーニングで見てきた反省点、これらを次回以降にどう生かすか、今後予定しているプログラムにどう反映させるか。イベントが終わったから合った人たちとのつながりについて仕事は終わらない。

今回の成果を形に残すためのレポートおこしやアンケートの集計、また今回の参加者を今後のIFNの活動につなげるためのHPなどの情報提供。IFNは今HPもできていない状態。まずはHPを作らなければと、今後もミーティングは続いていく。

(どもんみお)



2001. 9. 11  
in New York

## 割石 健介

アメリカ史上、いや世界史上未曾有の大事件が起きた二〇〇一年九月十一日に、幸か不幸かわたしはニューヨークのマンハッタンに滞在していた。もちろんこの文章を読む方でもこの事件のことを知らない人はいないだろう。しかし同時に、実際にNYにいた人もいないのではないだろうか？ わたしはあくまで偶然NYにいたにすぎないが、非常に稀な経験をしたと思っっている。そして、現

地にいたからこそ見、聞き、感じる  
ことができた様々なことを伝えたい。

● 語学研修

2001年8月25日、3週間の語学研修のためわたしは成田空港からニューヨークに向かった。語学研修といっても大学認定の留学ではなく、あくまで個人的に申し込んだも

のであり観光的要素も多分に含まれていた。その限りにおいては楽しみであったが、生まれて初めての海外であったので緊張や不安感のほうが大きかった。

そのためか、12時間以上にも及ぶ空の旅ではほとんど眠ることができず、窓際の席であったこともあり外の景色を眺めている時間が多かった。また機内(ユナイテッド航空)の乗務員にはアメリカ人が非常に多く、日常会話もままならないわたしは夕食時乗務員に、「meat or chicken?」と尋ねられた際、最初何と言っているのか聞きとることができない有様で、その後の旅にかなりの不安を覚えた。

さて現地時間で8月25日夕方、日本時間では8月26日未明(日本とニューヨークでは約13時間の時差がある)に無事ニューヨークのJFK空港に到着した。わたしはマンハッタ



ン大学のキャンパス内にある語学学校に通うことになっていて、その名

からわたしはマンハッタン島の中心部にあるものだと思ひ込んでいたが、実際はマンハッタンの中心部からは地下鉄で40分ほどの所にあり、閑静な住宅街に囲まれた非常に過ごしやすいところであった。

また、わたしは寮で生活していたのだが、最初の1週間はわたしの寮には日本人がわたししか居らず、ルームメートのベネズエラ人ルイスを含めた他のメンバーはなぜ留学しに来ているのかが不思議なくらいに皆英語が流暢であり、わたしだけがその輪に入ることができなかった。その

のため、やや落ち込んだ時もあったが、語学学校にいた多くの日本人と友だちになりお互い励まし合ううちに、日を追うごとにつたない英語やジェスチャーを交えながらコミュニケーションがとれるようになり、授

業も理解できるようになっていった。

さらに2週目から2人の日本人がわたしと同じ寮に入寮してきた際には、寮の管理人が言った言葉を彼らに伝えることが出来る程度まで上達(?)していて、自分でも驚くほどであった。もちろん、すべての言葉を

を理解できていたわけではないし、分からない言葉のほうが多かったくらいだが、全体を通して言いたいことを理解することはでき、次元が低い話かもしれないがその時初めて心から「アメリカに来て良かった」と思ったことを今でも鮮明に覚えてい

る。日本人以外にも様々な国の留学生と触れ合う機会もあり、多様な文化や思想を学べたことは非常に有意義であったが、同時に英語という言語の重要性を再認識し自らの英語力のなさを痛感した。ただ3週間の研修

生活では、英語の勉強はもちろんだが、日本を離れたことよって新しい自分の一面を発見できたし、様々な側面から自分自身を省みる良い機会となった。このように、わたしの研修は紆余曲折を経ながらも無事に終わるはずであった。あの事件が起ころるまでは：

#### ● 同時多発テロ発生

9月11日朝、わたしはいつものように授業のために学校に向かっていた。九月といってもニューヨークはまだかなり暑く、日本のような蒸し暑さはないものの非常に強い日差しが照りつけていた。わたしは研修中午前中に90分×2コマの授業をとつていて、その日も1限目の授業はいつも通りに行われた。

ところが、休み時間になって状況が一変した。教室を出るや否や日本

人の友人が、「ツインタワーに飛行機が墜落したらしい」と困惑した表情でわたしに言った。わたしは「まさか」と思ったが、学校の教員が血相を変えて全員教室で待機するようという旨の指示を出したので、「これはただことではない」と思い、校内も一瞬にして緊迫した空気に包まれた。

その後しばらくして、教員が事件の経緯を説明したが、この時点では情報もかなり錯綜していたように『テロ』であるという認識はまったくなく、ただ飛行機が墜落したということだけが伝えられた。授業終了後、学校の指示により生徒全員が家族に無事を伝え、校内もかなり落ち着きを取り戻していた。

しかし、その後インターネットで日本の報道を見ると各社いつせいに『テロ』という見出しで大々的にこの事件を報じており、事故だと思っ

ていたわたしたちは面食らい、むかしに校内も騒がしくなり始めた。昼食時にも我々の間ではこの話題で持ちきりとなったが、その時点ではまだ映像を見ることができなかった。まさかあれほどの大惨事であるとは想像もつかなかった。

しかし、その後寮に戻りテレビを見てわたしは愕然とした。そこには変わり果てたツインタワーの姿が映し出されていたのである。当時ニューヨークで最も高い建物で、象徴的な存在でもあったWorld Trade Center（世界貿易ビル）をわたしは事件のちょうど1週間前に訪れており、その圧倒的な高さにただ驚嘆するばかりであったが、見る影もなくなってしまうたその光景をテレビを通じて呆然と見つめるしかなかった。

が、わたしはここで重要なことを思い出した。そう、その週末にわた

しは帰国することになっていたので。テレビの報道によればニューヨークにある3つの空港はすべて閉鎖、地下鉄も運転を中止しているという。つまり、予定通りに帰国することができなくなってしまう可能性が出てきたわけで、非常に困惑した。これには大学のこと、サークルのことなど様々な理由があったが、一番困ったことは金銭面であった。テロが起きたのは帰国4日前だったがその時点で既に現金は40ドルほどしかなく、ただでさえ厳しい状況なのにもし帰国が延びてしまったら：と思うと不安にならずにはいられなかった。

翌日学校は臨時休校となった。しかし、帰国が迫っていたわたしは学校へ行き担当のスタッフと今後の対応について話し合った。前日の晩に行われたブッシュ大統領の国民向けテレビ演説や、様々な報道により既



に『テロ』であることは明らかにな

っていたので、スタッフはわたしのメンタルな部分を非常に心配してくださった。わたしは非常に落ち着いて話すことができたし、このときにもし予定通り帰国できなかったとしても寮には帰国できるまで残ってよいという許可も頂いた。また、事件発生以来、わたしはこの研修を申し込んだ旅行会社とも何度も連絡を取り合ったが、その対応も非常に良心的で心強かった。ただ現実問題として、予定通りに帰国できるかどうかは依然として不透明なままで、9月13日には一度空港閉鎖が解除されたが翌日にはまた閉鎖されるなど、不安定な状況が続いていた。

● テロ後の町・人々の様子

事件の起こった11日と翌12日は、地下鉄の運転は完全に停止してい

た。前述の通りわたしの通っていた

学校はマンハッタンの中心部からは地下鉄で約40分ほどの所にあり、車を持っていないわたしは留学生にとつては地下鉄が主な移動手段だったので、この両日は中心部に行くことができなかった。また、事件現場はマンハッタン島の最南端でありそこへは中心部からさらに地下鉄で30分ほどかかるので、学校からはもちろん現場の様子を生で見ることにはできないし、元々学校周辺は静かなところであったので大きな混乱はなかった。

ただ事件の次の日には、家々や商店街には早くも半旗を掲げている所もあり愛国心の深さが見とれ、さらには、おそらくこれはキリスト教の儀式の1つだと思われるが、町のあらゆるところで小さなキャンドルをもった人々が集まり、祈りをささ

げていたのが非常に印象的であっ

た。13日になると、地下鉄がマンハッ

タンの中心部までの折り返し運転ながらも運転を再開していたので、友人と出かけることにした。有名な5番街やタイムズスクエアを始めとしてマンハッタンは全体的に普段に比べ明らかに人通りが少なく、日ごろ頻繁に目にすることができるイエローキャブ(タクシー)のことも数えるほどであった。また、空には警戒にあたっていたと思われる戦闘機の爆音が鳴り響き、町中にも警官はもちろん、迷彩服姿の武装したアメリカ軍人までが警戒にあたるなど非常に物々しい雰囲気にも包まれていて、息苦しさを感じるほどであった。

また、事件現場のエリアをロウアー・マンハッタンと呼ぶのだが、この地区へは全面立ち入り禁止になっていて、実際に現場に行くことはできなかった。

## ● 帰国

さて、帰国予定日前日の14日になつても次の日に帰国できるかどうかは相変わらず不明なままであった。前述の通り、13日に一度は空港閉鎖

ルに誘われ、有名な『美女と野獣』の劇を楽しんだ。その公演は、事件後初めて行われたもので、劇終了後には会場全体で犠牲者への黙祷が行われた。そしてその後寮に帰り、お別れ会を開いてもらい最後の別れを惜しんだ。

が解かれたのだが、JFK空港で不審者が逮捕されたということでこの日再び空港が閉鎖されてしまったというのと、WTCに突っ込んだ飛行機のうち1機はわたしが乗る予定

結局この宴は朝方まで続き、朝7時ごろには空港までの迎えの車が寮に到着し、一睡もすることなく車に乗り込んだ。この迎えの車は、旅行会社が親切にも特別に手配して下さったもので、ドライバーの方は日本人であった。その道中、遠くからではあったが白煙のあがる事件現場の様子を見ることができたのだが、本来見えるはずの2本の巨大な柱はどこにもなく、その景色を見て何とも言い表すことのできない虚しさを味

る飛行機は飛ぶ予定だ」ということだったので、諸手続きを済ませることにした。ここで驚いたことが2点あった。1つはニューヨーク最大の空港であるJFK空港にほとんど乗客がいなかったことである。単純には比較できないが、日本でいえば成田空港クラスの空港に人影がほとんどなかったのだ。特別な状況だけに当然だったのかもしれないが、かなり異様な光景であった。

であったことがその大きな要因であった。ただ、旅行会社や学校の専門スタッフからは、「飛行機が飛ぶにしろ飛ばないにしろ空港には行くように」という指示を受けていたので、帰国の準備を終わらせてから、この日再開された授業に臨んだ。

1時間ほどでJFK空港に到着し、係員に尋ねたところ「今のところ

2つ目は、乗客の少なさとは反対に非常に警官の数が多く、セキュリティチェックも信じられないほどに厳しかったことである。国内線の警備がかなり甘く、テロの原因の一つとする声もあるようだが、その反動からか非常に厳しいチェックがなされた。具体的には、ズボンのベルトや靴の中身の検査はもちろん、キーケースの中身までチェックされる有様で、その周りを警官が取り囲むと

授業後には、最後の思い出にと友人たちにブロードウェイミュージカ

ら

ら



いった非常に仰々しいチェックであった。

フライトの予定時刻は11時であったが、その時間になっても一向に搭乗準備のアナウンスは流れないのでやはり今日は飛ばないのかと諦めかけていた。ところが1時ごろになって予定通りフライトするという旨のアナウンスが流れ、その瞬間わたしを含めた数少ない乗客から拍手が起き、日本によく帰れるとわたしは心底ホッとした。後に、このわたしが乗った飛行機はユナイテッド航空の中では事件後初のフライトであったことが判明したのだが、機内食の際のナイフとフォークは、行きの飛行機では金属製の物であったのに対し帰りはプラスチック製品であったことや、飛行機の中でも再度セキュリティチェックが行われるなど、細部に至るまで厳戒態勢でのフライトであった。こうして、あつという

間の2週間と非常に長い1週間の計3週間に及ぶわたしの語学研修は幕を閉じたのである。

### ●おわりに

初めての海外、ましてやたった3週間という短期間の語学研修でまさかこのような経験をすると夢にも思っていなかった。この事件には、冷戦期にソ連がアフガニスタンに侵攻したことに端を発するいきさつがあるといったような様々な政治的要因があり、それを挙げればきりがないうが、わたしは日本メディアの報道の過激さにやや驚いた。

この事件に関しての日本メディアの報道状況を考えてみると、わたしにはアメリカを完全な被害者として扱い、それに対する米軍の報復を当然のように容認しているように受け取れるが、それは余りにも危険過ぎ

やしないだろうか？

確かに今回のような『テロ』は決して許すことはできないし、かりに過去の歴史をまったく抜きにしてこの事件が起きたのだとすれば、わたしはアメリカの報復は正当であると思う。しかし実際は、過去に様々な歴史的事実があったからこそこのような事件が起きてしまったはずである。それなのに、その事実をまるで無視しアメリカの正当性を過度に伝えていた日本メディア（特に事件直後にこの傾向は目立っていた気がする）に、やはりわたしは疑問を感じずにはいられない。

最後に・・・

この事件で尊い命を落とされた方のご冥福を心からお祈り申し上げます。

（わりいし けんすけ）

〈 編 集 後 記 〉

◇ 3月はじめに新潟県村上市に雛人形をみにいきました。村上市では毎年3月に古い商店や町屋がいつせいに秘蔵の雛人形を一般公開しています。古くは江戸時代初期の人形もあつてとても楽しみました。(ふ)

◇ どの家にも必ずいる象のお尻。今回はこれをモチーフに表紙の絵を考えてみました。パソコンの落書きは結構楽しめます。(の)

◇ パソコンを使って割引航空券を購入使用としたときのことです。登録が必要とわかつてその手続きをしているうちにタッチの差

で予約時間のリミット30分を切つてしまいました。回数券が使えない時期なので悔しい。パソコンや電子メールは便利だけど、使いこなせないときの悔しさもまた格別ですね。(た)

◇ 今年はたいへん春がはやいです。雪の解けるのもはやく、桜の花が咲くのも例年より10日もはやくなりそうだとか。ここ鶴岡では4月中ごろに花見ができそうです。(ふ)

◇ 17号に引き続き18号を年度内に発行しようという無謀なことに挑戦。ご購入いただいたいるみなさまのみならず、原稿を書いていたいただいた方々、登場していただいた方々には大変ご迷惑をおかけ

しました。申し訳ありませんでした。(た)

◇ 大学生の娘がダンスに夢中になっていきます。このあいだ通っているダンススクールの卒業公演がありミュージカルをみにいきました。親ばかりが、なかなか身のこなしも軽やかでした。(も)

◇ 帰りに家族で食事に行きました。長男夫婦、次女、次女の友だち、二男とわたしたち夫婦という顔触れです。最近の就職難が話題になりました。とくに女子学生は半端ではありません。次女たちもたいへんな目にあっています。仲間と打ち上げをしていた三女は、その夜遅くにハイテンションで帰ってきました。(も)

前号の訂正

45ページ  
中段5行目「一つ」を「一つひとつ」に。  
下段7行目「どばして」を「とばして」に訂正します。

たいへんご迷惑をおかけしました。お詫びいたします。

連絡先

〒920-0972

石川県金沢市杉浦町

1の1

家族とくらしの会

代表 広岡立美

☎ 076-231-5175

FAX 076-231-5175





# 女性の自分育てを応援する雑誌



表紙・広岡伸子  
マーク・けらえいこ 題字・弓削明子  
カット・小谷恵子 広岡史子 広岡伸子

家族とくらし 18号

2002年3月31日発行

発行所 家族とくらしの会

発行人 広岡立美

〒920-0972 石川県金沢市杉浦町1-1

600円